

中学校生活と部活動に関する社会学的研究

——東京23区内における質問紙調査を通して——

比較教育社会学コース 西 島 央
日本学術振興会特別研究員 藤 田 武 志
大妻女子大学非常勤講師 矢 野 博 之
比較教育社会学コース 荒 川 英 央
比較教育社会学コース 羽 田 野 慶 子

School Life and Club Activities in Japanese Junior High Schools :
A Sociological Study based on a Questionnaire Survey in Tokyo

NISHIJIMA Hiroshi, FUJITA Takeshi, YANO Hiroshi, ARAKAWA Hideo, HATANNO Keiko

Our concern is to examine the differentiation between secondary school students. Although a great deal of effort has been made with regard to the theory of tracking-perspective, what seems to be lacking is a exploration of other factors of differentiation, besides academic achievements, and a consideration of lower secondary education. Eminent as the theory is, it has been applied too monotonously to explanations of differentiation. We focused on junior high school students, especially on their club-activities, and made a questionnaire survey of 912 students from six junior high schools in Tokyo. We examined five subjects: student sub-cultures, career prospects, peer relationships, family background, and gender. From these view points we recognized additional factors contributing to between students. Viewed in this light, we propose that one-dimensional model ought to be modified to take into account "a plural model of school culture".

目 次

- はじめに
- I 先行研究の検討と課題の設定
- II 調査の概要と調査対象者の属性・特性
 - A 調査の概要
 - B 調査対象者の属性・特性
- III 生徒文化と進路選択
 - A はじめに
 - B 生徒文化の分化の規定要因
 - C まとめと今後の課題
- IV 部活動における人間関係
 - A 課題の設定
 - B 生徒の分化の規定要因
 - C まとめと課題
- V 家庭環境と部活動—スポーツ・文化的活動への関わり方に対する影響を中心に—
 - A 問題の所在
 - B 家庭環境とスポーツ・文化的活動への関与
 - C 家庭環境との関わりからみた部活動の位置
 - D まとめと課題
- VI ジェンダー意識—身体性との関わりを中心に—
 - A 問題の所在
 - B 「ジェンダー意識」の概要
 - C ジェンダー意識と運動能力
- VII 中学生の分化モデル
 - A 中学校における教育活動の組織化
 - B 多元的学校文化モデル
- おわりに

はじめに

本研究は、東京都の公立中学校において実施した質問紙調査のデータをもとに、生徒の部活動へのかかわりに焦点をあてて、生徒の学校へのかかわりかたや進路選択のさまざまなパターンの様子を明らかにし、その分化の規定因を探ることを目的としている。

これまで生徒の分化の規定因を探る学校社会学的研究においては、高校段階を中心に実証研究が蓄積され、トラッキング・パースペクティブによって生徒の分化を説明する図式が確立されてきた。しかし、トラッキング・パースペクティブによって説明されるのは、高校段階の、学業成績に基づく進路選択を中心にした生徒の分化に限られている。また近年、トラッキング・パースペクティブによっては十分に説明できない分化の様子や、中高生の意識や行動も指摘されている(耳塚 1993, 樋田他 1999)。

そこで本研究では、トラッキング・パースペクティブのオルタナティブを模索するべく、中学校における生徒の分化の規定因を、部活動に注目しながら、仮説生成的に探っていく。

I 先行研究の検討と課題の設定

1950年代後半から60年代にかけて高校や大学への進学率が上昇する過程において、学校社会学の関心のひとつは、教育機会や選抜のしくみを明らかにすることであった。そして、人々に学業達成を通して社会経済的な成功を求める業績主義的志向が共有されているという前提のもと、主に高校段階を対象に実証研究が積み重ねられた。70年代以降高校教育が普遍化した段階で取り組まれたのは、「高校生文化と進路形成の秩序、すなわち学校ランクに応じて生徒文化が形成され、また生徒の進路選択が枠づけられる『トラッキング』のメカニズム」を明らかにすることであり、「高校ランクによって、高校教育の機能・構造・過程をとらえようとする基本的枠組み、すなわち『トラッキング・パースペクティブ』」(樋田他 1999)が確立された。

トラッキング・パースペクティブは、その後、学校社会学の領域で生徒の分化を説明する際の主要な分析枠組みとして用いられている。しかし、トラッキング・パースペクティブによって主に説明されるのは、第一に高校段階の、第二に学業的な地位達成に向けた進路選択を中心にした生徒の分化に限られていることに留意する必要がある。

まず第一の点について検討していこう。日本の教育機会や選抜の実態を説明するのに初めて藤田(1977, 1980)がトラッキング概念を用いた時点では、その概念を適用するのは高校段階に限られてはならず、また課程別、能力別、資格別などさまざまな教育的・社会的トラッキングがあると想定されていた。にもかかわらず、トラッキング・パースペクティブが「高校ランクによって、高校教育の機能・構造・過程をとらえようとする基本的枠組み」へと収斂していった背景には、少なくとも以下のふたつの理由があったと考えられる。

ひとつめは、高校教育が普遍化した段階で、教育機会や選抜研究の領域で最も関心をもたれたのが、高校の学校格差とそれに伴う生徒の分化をめぐる問題だったことである。高校数の増加と、従来なら進学してこなかった生徒が高校に入ってくるようになったことで、高校間格差が拡大し、さまざまな学力や関心をもつ生徒が増加した。そこで、高校間格差が選抜過程においてどのような機能を果たしているのかということと、多様化した生徒の特徴がどのようなものであるのかという生徒文化の類型の抽出と、その類型の生成過程や機能を解明することが社会的に重要な研究課題となった。

ふたつめは、トラッキングとは「たとえば複線型学校システムのように生徒の進路を限定するというのではないにしても、実質的にはどのコース(学校)に入るかによってその後の進路選択の機会と範囲が限定されること」(藤田 1980)であり、高校段階に適合的な概念であったことである。一般の公立中学校では基本的に生徒の学業面でのグルーピングが存在しないのに対して、高校段階では、学科・コースや高校ランクや習熟度別学級編成などのように生徒の学業面でのグルーピングが制度的組織的に存在しているからである。

たしかに、中学校段階以下の生徒・児童の分化の様子を明らかにする必要性に言及したり、実証的な検討を試みたりした研究は少なくない。しかし、管見のかぎり、小中学校段階に固有の説明枠組みが確立されたり、系統だった実証的な研究成果があがったりしているとはいえない。たとえば耳塚らの一連の研究は、小中学校段階での学業成績の変容と進路形成との関係を縦断的に調査している(耳塚他 1983, 耳塚 1986)。しかしそれは、高校間格差がトラッキングシステムとしての硬直性を増すにつれて、選抜・配分機能がより下の学校段階へ移行するという論理で、トラッキング・パースペクティブに基づいて中学校段階以下での選抜・社会化の過程を明らかにしようとしたものであった。

それに対して志水(1985)は、「高校における生徒の

進路および行動様式・意識などの分化は、彼らの間にある『潜在的な分化が一挙に顕在化したもの』、換言するなら『中学校での選抜の半ば自動的な帰結』と見ることができる(213頁)と述べて、高校段階での生徒の分化の真相を明らかにするために、まず生徒の分化に関する中学校固有の論理を明らかにする必要性を指摘している。

中学校に制度的組織的な生徒のグルーピングが存在しないならば、高校段階における生徒の分化に関する説明枠組みを敷衍して中学校段階の生徒の分化を説明するのではなく、志水が論じるように中学校段階独自の論理で生徒の分化の過程やその規定因を捉えるべきであると考えるからである。

では、第二の「学業的な地位達成に向けた進路選択を中心にした生徒の分化に限られている」点について検討しよう。教育機会や選抜の研究が進められた背景には、人々の社会経済的な成功がいかん達成されるかというマクロレベルの関心があり、ミドルレベルでは、進路選択や生徒文化といった生徒の分化のメカニズムを明らかにする研究が行われてきた。

それらの生徒の分化に関する研究は、欧米の当該研究の影響を受けている。例えばColeman(1961)は、アメリカの高校ではアカデミックな学業の志向よりも遊び指向の価値が優位であることを明らかにすると同時に、運動中心の生徒文化が、学業を志向するフォーマルな学校文化と矛盾・対立せず、むしろ学業と両立し、学業と並んで重要な価値をもつものと捉えられている様子を明らかにしている。これに対して武内(1972)はアメリカと対比して、「日本ではイギリス同様、アチーブメントの重視は一方的であり、それに対して生徒活動やあそびは逃避的あるいは補償的な意味しか持ちえない」(177頁)と述べた。それを前提として耳塚(1980)が生徒文化の分化の説明モデルを精緻化して以来、我が国の生徒の分化に関する研究は、学業成績に基づく「トラッキングメカニズム」に対するリアクションのかたちで生徒の学校に対する意識や態度を扱ってきたのである。

ところが1980年代後半以降、「我が国の学校社会には一元的な能力主義が成立し、教育選抜を覆っているという前提」(耳塚 1993)に対して、高校ランクの中下位校において、学業成績という変数では説明できない生徒の分化のメカニズムが存在しているという報告がなされている(たとえば 竹内 1987, 伴 1990 など)。

これらの報告は、高校ランクの中下位に位置する生徒の冷却にあたって学業成績とは異なる変数があることを明らかにしたというような、トラッキング・パースペクティブによる生徒の分化の説明のひとつの関係性モデル

を発見したにとどまるものではない。たとえば樋田他(1999)は、「トラッキングの弛緩」をキーワードに、1979年と97年の調査を比較し、トラッキングの変容を検討している。そこでは、①学業コミットメントや学校適応における高校ランク間の差(とくに上位校と中位校の間)が縮小したこと、②地位欲求不満説の説明力が低下していること、③トラッキングの影響力が選抜度の高いレベル以外では弛緩していること、④トラッキングを分析するために従来用いられてきた学業成績、高校ランク、家庭背景といった変数の影響力が低下しつつあることなどを指摘している。さらに、竹内(1995)の「メリト・イデオロギーの揺らぎ」や岩田(1998)の「コンサマトリーな意識の台頭」といった指摘は、成功が社会経済的な資源の分配という水準から、個人の精神的な充足という水準へと推移したことによって、人々の業績主義的な志向が揺らいでいることを示している。このように、トラッキング・パースペクティブは、単に高校段階の生徒の分化の説明力が落ちてきているにとどまらず、説明枠組みの前提の揺らぎによって、その妥当性が疑われてきているのである。

ところが、それらの研究において、トラッキング・パースペクティブのオルタナティブが提示されたわけではない。それは、学校内にみられる諸事象を新たに独立変数に加えるばかりで、社会や青年文化との関係において学校がどういう位置にあり、どう意味づけられてきたかという相対的な価値関係とその変遷に関する検討と関連づけられてこず、学校内外でみられる生徒のさまざまなグルーピングを十分に考慮しなかったことによると考えられる。

しかし、上述の諸研究の指摘によれば、トラッキングの弛緩や説明力の低下は、学業成績に基づくグルーピングという構造じたいのもつ社会的意味が変化してきているということを示唆していよう。とすれば、第一に、生徒の分化を捉えるにあたって、主として学業成績という軸で構成されていたトラッキング・パースペクティブが生徒の分化のリアリティを把握しきれなくなっていること、第二に、今日の生徒の分化のありようを説明するためには、社会経済的な成功というマクロレベルから生徒の分化というミドルレベルの問題を捉えるために用いた学業成績以外の、新たな視点に基づく分析軸を導入して、相対的に検討する必要があることが理解されよう。

先取りしていえば、本研究では、生徒の分化を説明するための新たな視点として生徒の部活動へのかかわりに

注目する。

これまでも、生徒の分化における部活動の機能に注目した研究は行われている。たとえば白松(1993, 1994, 1995, 1996, 1997)は、部活動への参加が学校適応に直接的な効果をもち、間接的に学業成績にもプラスの影響を与えていることを明らかにしている。より詳しくは、学校ランク上の上位校では学業成績に基づく価値体系が強いが、中・下位校では部活動に関する「ステータスシステム」が存在しており、部活動が参加者の学校適応を維持・増大させ、その効果が学業成績や進学アスピレーションにも影響を与えていることや、部の規模や参加大会レベルなどの面からみて活動の盛んな部に所属している生徒ほど学校に適応していることなどを明らかにしてきている²⁾。

また武内(1993)は、今日では高校生の遊び文化が学校生活に適応的であるとして、部活動に注目している。すなわち、①部活動に積極的な生徒がより勉強していること、②同じ運動部に熱心な生徒でも、私立スポーツ校の生徒はスポーツの実績で私立大学に推薦で入学しようとするのに対して、公立・私立進学校では、家に帰ると進学に向けて勉強しているというように、進学のしかたの違いによる学校差がみられること、③校外活動との関連でも、運動部所属者が校外での友人関係がより強いものになっていることなどを例示して、「部活動(とりわけ、運動部)は上位の階層や上位の高校の活動となり学業と対立するものでなくなっている」(112頁)と論じているのである。

このように、社会の多様化や個性化、消費社会化の進展に伴って、第一に、高校や大学への進学にあたって、学業成績ばかりでなく、課外活動や学校外での活動なども選抜の際の評価の対象になってきていること、第二に、生徒の日常の生活や活動の論理や場が、学校内の学業達成を第一義におくものにとどまらず、学校外の論理や場に依拠するようになってきていることなどをふまえて、今日の日本の学校教育、とりわけ高校においても、Colemanがアメリカの高校について論じたような状況になってきている可能性が示唆され始めている。

その意味で、生徒の部活動へのかかわりに注目することで、学業達成を通して社会経済的な成功を求める業績主義的志向の共有を前提にしていたトラッキング・パースペクティブとは異なる視点から、学業達成や進路選択に限らない学校へのかかわり方について、また学校と社会との関係も考慮に入れて、生徒の分化のさまざまなパターンの様子を明らかにしていくことができるのではないだろうか。

とくに中学校段階における生徒の分化を明らかにするにあたっては、生徒の部活動へのかかわりは有効な変数となりうると考えられる。第一に、多くの中学生にとって部活動は学校生活にとどまらず日常生活においても大きな位置を占めているからである。つまり、『モノグラフ・中学生の世界』の最近のデータによれば、中学生の約90%が部活動に加入しており、週に5日以上活動しているものが79.3%、休日にもほぼ毎回活動しているものが32.8%、1回あたりの活動時間が2時間以上のものが56.4%となっているのである(深谷編 1998)。第二に、中学校においては、教師側からみたとき、生徒指導の重要な手段と位置づけていることが多い。進学の際の評価においても、特記事項として部活動へのかかわりの様子が加えられることもある。つまり、学業成績によるグルーピングが基本的に存在しない公立中学校において、部活動のかかわり方には、白松の指摘した組織的な差異、加入・不加入、参加の度合い、活動実績などといった差異が存在しているからである。

また、トラッキング・パースペクティブのオルタナティブとして考えたときに、第一に、部活動での実績が進学・就職の際の評価の基準にもなっていることで、進路選択における生徒の分化のメカニズムを明らかにする際に、学業成績とあわせて検討できること、第二に、のちの各章でみるように、学校外とのかかわりをも考慮に入れることができ、部活動へのかかわり方の差異の要因をも分析の対象に含めることができることから、有効な視点になりうると考えられる。

そこで、以下の各章では、中学校段階における生徒の部活動へのかかわりを軸に、進路選択、生徒文化、家庭環境、人間関係、ジェンダー意識といったトピックを取り上げながら、生徒の学校へのかかわりかたや進路選択のさまざまなパターンの様子进行を明らかにし、あわせてその分化の規定因を仮説生成的に探っていくことにしよう。

(西島 央)

註

- 1) トラッキング研究のレビュー部分は、藤田との共著。
- 2) しかしながら、白松の一連の研究は、トラッキング・パースペクティブに基づき、学業成績に基づく生徒の分化を指定しており、そのうえで学業成績上の中下位に位置づく生徒の冷却のしかたのひとつの変数として部活動に注目したものにすぎない。

II 調査の概要と調査対象者の属性・特性

A 調査の概要

1 調査時期・方法

1999年2月～3月に、東京都23区内の公立中学校6校の2年生912名を対象に、教室内での集合自記式の質問紙調査を実施し、あわせて調査対象校の学校要覧や東京都の部活動の様子がわかる中学校体育連盟の資料などを蒐集した。

2 調査対象校の選定

今回の調査では、東京都23区内の公立中学校に限定して調査対象校の選定を行った。地域性を考慮して、南東、南西、北西、北東の各地域から2、3校ずつ、東京都中学校体育連盟の資料を参考になんらかの運動部が東京都レベルでめだつた活躍をしている中学校を選定して調査を依頼した。その結果、南東地域3校、北西地域2校、北東地域1校の計6校で調査を実施することができた。調査対象学年は、部活動の中心になってきており、またこれから進路選択を考え始める時期であることを考慮して、2年生とした。

3 公立中学校の部活動に関して

平成元年に改訂された学習指導要領によれば、中学校の部活動のあり方には、制度上2種類の形態がある。ひとつは、教育課程上の「クラブ」で、いわゆる「必修クラブ」と呼ばれるものであり、これは本来的にはすべての中学校で特別活動の一環として実施しなくてはならないことになっている。もうひとつは、教育課程には組みこまれてはいないが、学校教育の一環として行われている「部」で、いわゆる「部活動」または「課外クラブ」と呼ばれるものであり、本来的には任意の活動である。

しかし、実際の運営にあたっては、「部活代替」と呼ばれるしくみを採用している中学校が多い。これは、特別活動における「弾力的な取り扱い」の一環として事実上行われてきたものが上記学習指導要領改訂時に明記されたもので、「部」にすべての生徒が必ず所属することを前提として、本来授業の中で行うべき「クラブ」を行わず、「部」でその特別活動を代替させようというものである¹⁾。

今回の調査対象校は、すべての中学校が制度上部活代替を取り入れているが、部活動への加入率が100%でないケースがみられる。それは、生徒自身の意志において実質的に加入していないと判断している生徒が、「部活動に入っていない」と回答したためである。

なお、以上のような現状をふまえて、本研究において「部活動」と表現するばあい、それは基本的に「部活代替」の「部」を示すものとする。

B 調査対象者の属性・特性

本節では、以下の各章で分析・考察を進める際の基礎的な情報となるような、調査対象者の属性と特性について記述的にまとめておく。

1 サンプル構成

調査対象校別、男女別にみたサンプルの構成は、表II-1のとおりである。

表II-1 調査対象校別、男女別サンプル構成(実数)

学校	男子	女子	総数
SE1中	75	65	140
SE2中	78	71	149
SE3中	74	69	143
NW1中	90	54	144
NW2中	23	28	51
NE1中	139	146	285
合計	479	433	912

2 部活動への参加の様子

部活動への加入状況を確認すると、全体では91.4%が部活動に加入していると回答している。学校別にはNE1中を除く5校が90%以上の加入率で、NE1中は78.5%と他校より低い。これは学区域が広いこと、通学時間などの問題から学校側としても事実上の部活動未加入者を認めざるをえないことによる。加入者のうち、運動部に所属している生徒が64.9%で、文化部に所属している生徒が31.6%となっており、男子はほとんどが運動部に所属しているのに対して、女子は運動部と文化部にほぼ半々に分かれて所属している。

部活動にどのくらい力を入れているかを尋ねたところ、「かなり力を入れている」が24.5%、「まあ力を入れている」が44.8%と、3人に2人が部活動に積極的にかかわっている様子が見える。男女差をみると、男子の方がやや積極的にかかわりをみせている。

実際にどの程度部活動に参加しているかを尋ねたところ、「ほとんど毎回参加」が53.3%、「7、8割参加」が17.7%となっており、主観的にみたかかわり方とほぼ一

致している。ただし、男女差はみられず、女子には積極的にはかかわっていないが、活動日にはちゃんと参加している生徒が少なからずみられる。

部活動のなかで一番楽しいことはなにかを尋ねたところ、全体では「友だちとおしゃべり」が41.3%、「練習や活動」が34.2%、「試合やコンクール」が18.4%となっているが、男女差がみられ、男子は「練習や活動」や「試合やコンクール」を、女子は「友だちとおしゃべり」を楽しみにしている。

3 学業の様子

主観的な判断に基づくクラス内での相対的な成績を尋ねたところ、「上の方」が6.7%、「上とまんなかの間」が20.5%、「まんなか」が34.4%、「下とまんなかの間」が23.0%、「下の方」が14.3%と、多少低めに見積もられているが、おおむね正規分布に近いかたちに散らばっている。

通塾率は53.1%であり、それは、文部省による「平成五年度 学習塾などに関する実態調査」における中学2年生の59.1%とも近く、ほぼ妥当な数値だろう。

4 学校生活全般の様子

学校での様子と充実度を尋ねた質問を表Ⅱ-2にまとめた。ほとんどの生徒が授業中にノートを取り、しっかり授業を聞いているようだが、テスト前に勉強をがんばるのは3人に2人である。学校行事に積極的なのは3分の2ほどで、女子の方が積極的である。学校のきまりは

4人に3人が守っていると回答しているが、やや女子の方がルーズさがめだつ。

授業や先生との会話などの学業にかかわる場面では、「とても充実」が一桁台にすぎない。「学校行事の準備」「部活動」などの課外活動の場面では「とても充実」が20~30%台ほどとなっている。「友だちとおしゃべり」や「昼休み」といったインフォーマルな場面での充実度が最も高く、いずれも8割以上が肯定的な回答をしている。

トータルとしての学校満足度（「あなたは学校生活についてどのくらい満足していますか」）は、「とても満足」は9.4%にすぎないが、「まあ満足している」とあわせると、肯定的な回答が69.5%にも上っている。男女差をみると、女子の方が若干満足度が低い。

5 性格特性や価値観

生徒の自己肯定観などの性格特性と、将来の生活観や成功観などの価値観を尋ねた質問を表Ⅱ-3にまとめた。自己肯定観が高く、欲求を先延ばしにするよりは今を楽しみたいという性格特性や、職業に就くに当たって高い収入よりも好きな仕事を選ぶという価値観が7割前後の生徒に共有されている状態は、前章でみた竹内（1995）などを支持する結果といえる。また、テスト前での競争意識を半数以下の生徒しかもっていないこと、高い収入を得るために高学歴が必要と思っている生徒が半数ほどしかいないことなども、従来の学業達成が社会的な成功につながるという価値観が、中学生には自

表Ⅱ-2 学校での様子・充実度 (%)

	全体	男子	女子
授業中ノートを取っている	54.7+34.3	51.4+34.2	58.4+34.4
テスト前はがんばって勉強する	23.9+40.9	24.4+39.7	23.3+42.3
学校行事に積極的に取り組んでいる	20.1+42.0	16.7+40.3	23.8+43.9
学校の決まりをきちんと守る	21.5+55.2	26.5+52.2	15.9+58.4
授業充実度	6.4+61.0	8.8+59.9	3.7+62.1
先生との会話充実度	8.0+39.8	10.0+40.7	5.8+38.8
部活動充実度	31.4+39.3	34.8+34.3	27.6+44.7
学校行事の準備充実度	19.4+46.9	18.0+43.4	21.0+50.8
友だちとおしゃべり充実度	52.4+38.6	46.3+43.4	59.1+33.3
昼休み充実度	47.0+39.3	47.4+38.6	46.7+40.0

(「とても+まあ」)

表Ⅱ-3 性格特性・価値観 (％)

	全体	男子	女子
がんばらばたいのことはできる	75.1	76.4	73.7
先のことより今を楽しみたい	64.7	63.0	66.5
テスト前は競争している気持ちになる	41.3	43.0	39.2
収入より好きな仕事	74.6	71.0	78.5
高い収入には高学歴が必要	52.2	58.2	45.3

(「とても+まあ」をあわせた肯定的な回答の割合)

明のものとしては受け入れられなくなっていることを示している。

6 将来の進路展望

中学校卒業後の進路展望は、「高卒後就職・家の手伝い」が18.9% (男子21.1%, 女子16.4%), 「高卒後専門学校進学」が22.6% (男子17.3%, 女子28.4%), 「高卒後短大進学」が9.4% (男子5.0%, 女子14.3%), 「高卒後4年制大学進学」が32.7% (男子38.8%, 女子25.9%), 「考えたことがない」が10.7% (男子11.5%, 女子9.9%) などとなっている。

高校選択の基準として、「自分の学力にあっているかどうか」を重要と考えている生徒は96.2%と最も多い一方で、「自分のやりたい部活動があるかどうか」を重要と考えている生徒も71.9%と二番めに多かったことは注目できよう。

(西島 央)

註

- 1) 学習指導要領では、次のように定義されている。「部活動に参加する生徒については、当該部活動への参加によりクラブ活動を履修した場合と同様の成果があると認められるときは、部活動への参加をもってクラブ活動の一部又は全部の履修に替えることができるものとする。」この弾力的な取り扱いを学校単位で行うばあいが、部活代替である。

Ⅲ 生徒文化と進路選択

A はじめに

本章では、中学校における生徒文化と進路選択の分化の規定要因について、調査データをもとに仮説生成的に考察する。

これまで、生徒の分化は学業成績という要因で説明されてきた。それは、学校は学業成績という価値体系を軸

にした社会化、正当化、配分の機関であり、高い学業成績が良好な自己評価をもたらす(社会化)、学校の秩序に順応させ(正当化)、進学アスピレーションを高める(配分)一方、低い学業成績はその逆になるという図式として理解できる。学業成績が分化の軸になるのは、生徒たちの能力アイデンティティを作り出すエージェントが学校であり、その能力アイデンティティによって学校への関与が決定されるからである(耳塚 1992)。約言すると、学校で作られた能力アイデンティティを軸に、生徒文化の分化(社会化・正当化)と、進路選択の分化(配分)がもたらされるというのである。

しかし、学業成績が生徒の分化の軸として機能していることと、分化の軸が学業成績だけかどうかは別問題であり、後者の問題をきちんと検討する必要がある。生徒文化を教師文化からの圧力への対処行動(白石 1985)として理解した場合、石川の小学校に関する次の指摘は示唆深い。すなわち、学校の役割が極端に教科教育に偏っているマルタ共和国では、生徒と教師の関係は学業成績という単一の評価軸で決定される傾向があるのに対し、全人教育的を担う日本の学校の生徒と教師の関係は、学業成績と同時に、行動評価という独立した軸が存在しているというのである(石川 1999)。これは、学校を拘束する社会的文脈(objectiveな契機)の違いによって、教師による教育活動の組織化(subjectiveな契機)の様相が異なることを示している¹⁾。日本の中学校について考えれば、高校受験との関連から教科指導の側面が強調されやすいが、周知のように、生活指導や、部活指導をはじめとする特別活動など、教科指導以外にもさまざまな役割を担っている。そういったobjectiveな契機を視野に入れるならば、教師による教育活動(=教師文化)は、必ずしも学業成績という単一の軸だけで組織化されているとは限らず、教師文化に対する生徒たちの対処行動(=生徒文化)も、学業成績によってのみ分化しているとは限らないだろう。

以上の見地から、生徒文化と進路選択の分化に関して、学業成績と同時に、部活動への関わりなど学業以外の諸側面との関連も検討していこう。

B 生徒文化の分化の規定要因

1 社会化：自己評価の分化

本項では、中学校における社会化の側面から生徒文化の分化について検討する。従来この点については、学業成績が低い者ほど自己評価が否定的になり、反学校的、あるいは脱学校的な態度を身につけていくという「地位欲求不満説」が支持されてきた（たとえば耳塚1980、潮木他 1980など）。では、学業成績だけではなく、部活動へのコミットメントなどの学業以外の要因は、自己評価の分化にいかに関わっているのだろうか。その点について、自己評価を測る指標として「がんばればたいていのはできる」という設問を用い、それを二段階に分割したものを従属変数として検討する。この設問に肯定的に答えた者を自己評価の高い者と考える。

学業成績の自己申告の設問を三段階に分割した変数を独立変数として、自己評価変数とクロス集計した。従来の説の通り、学業成績が上位になるほど従属変数を肯定する割合が多く、下位になるほど否定する割合が多い($n=899$, $p=0.000$)。では、部活動に対するコミットメントと自己評価は関連があるだろうか。

部活動にどのくらい力を入れているのかを尋ねた設問を、部活動へのコミットメントの程度を測る指標とし、それを二段階に分割したものを独立変数として自己評価変数とクロス集計した。部活動に力を入れていると答えた者に自己評価が高い者が多く、逆に力を入れていると答えた者に自己評価が低いという相関が有意であった($n=825$, $p=0.010$)。さらに、運動部と文化部に分けた場合、上記の相関は運動部だけに有意であった(運動部： $n=536$, $p=0.058$ ／文化部： $n=264$, $p=0.269$)。中学生や中学校には、運動に対する何らかの価値づけが存在しているのだろうか。それを確かめるため、運動がどのくらい得意かを尋ねた設問を三段階に分割した変数を独立変数に用いて自己評価とクロス集計した。その結果、運動能力の高い者の方が自己評価も高く、運動能力の低い者の方が自己評価も低いという相関が有意であった($n=906$, $p=0.000$)。

以上から、自己評価の分化に、学業成績、部活コミットメント、運動能力が影響していることが分かった。しかし、それらの変数は互いに関連している可能性がある。こうした要因間の相関関係の影響を統制し、各要因の独自の影響を調べるため、自己評価を目的変数とし、

上の三つの変数を説明変数として重回帰分析を行った。説明変数は、学業成績(上位ダミー、下位ダミー)、運動能力(得意ダミー、苦手ダミー)、部活コミットメント(力入れてる、入れてない)、性別(女性ダミー)を用いた。その結果が表Ⅲ-1である。

表Ⅲ-1 自己評価を目的変数とした重回帰分析

	標準化係数	有意確率
運動苦手	-0.135	0.001
運動得意	0.130	0.001
成績上位	0.124	0.001
部活コミットメント	0.062	0.070
成績下位	-0.051	0.190
性別(女)ダミー	-0.020	0.559

$R^2=0.096$, $p=0.000$

表Ⅲ-1からは、第一に、学業成績が上位であることと運動能力は、自己評価に対して有意に影響を与えていることが分かった。第二に、部活コミットメントは10%水準で有意だが、学業成績や運動能力に比べ、自己評価に対する影響力は、ごく小さなものにしかならないことが分かった。なお、学業成績と運動能力の相関係数は非常に小さく($r=0.090$, 1%水準で有意)、二者は独立して自己評価に影響を及ぼしていると言える。

以上から、自己評価に関して次の二点を指摘できる。第一に、これまで言われてきた通り学業成績を軸とした分化が生起しているとともに、第二に、それとは相対的に独立した運動能力という分化の軸も存在していることが明らかになった。

2 正当化：向学校-反学校の分化

本項では、中学校秩序の正当化という側面から、生徒文化の分化を検討しよう。

まず、学校生活にどれくらい満足しているかを尋ねた設問を従属変数に、前項で用いた学業成績、部活コミットメント、運動能力の三変数を独立変数にして検討する。学校満足度と学業成績、学校満足度と運動能力、学校満足度と部活コミットメントの三種類のクロス集計をしたところ、それぞれ有意に関連していることが分かった(学校満足度×学業成績： $n=900$, $p=0.005$ ／学校満足度×運動能力： $n=905$, $p=0.000$ ／学校満足度×部活コミットメント： $n=827$, $p=0.000$)。

次に、学校満足度だけではなく、学校適応的(向学校

的)な意識や態度の分化について、また、その分化に対する諸独立変数それぞれの独自の影響力について検討する。学校適応的な意識や態度を測る指標として、次の諸変数から合成変数を作成した²⁾。用いた変数は、「授業の充実度」「先生との会話の充実度」「学校行事の準備の充実度」「学校の授業はおもしろい」「学校行事に積極的に取り組む」「授業中きちんとノートをとる」「テスト前はがんばって勉強する」「学校のきまりをまもっている」「学校に行くのが嫌になったことがある(逆転項目)」「学校生活満足度」の10変数である。この学校適応変数を目的変数とし、前項と同じように「学業成績」「運動能力」「部活コミットメント」「性別」の四変数を説明変数として、重回帰分析を行った。その結果が表Ⅲ-2

表Ⅲ-2 学校適応を目的変数とした重回帰分析

	標準化係数	有意確率
部活コミットメント	0.229	0.000
成績下位	-0.208	0.000
運動得意	0.126	0.001
成績上位	0.060	0.103
運動苦手	-0.040	0.283
性別(女)ダミー	0.033	0.316

R²=0.166, p=0.000

である。

表Ⅲ-2に明らかなように、これまで用いてきた学業成績、運動能力、部活コミットメントの三変数は、学校適応の分化に対してそれぞれ有意に影響を及ぼしている。なお、学業成績は下位であることがマイナスの影響を、運動能力は得意であることがプラスの影響を及ぼしている。また、三変数のなかでは特に部活コミットメントの影響力が強い。

学業成績上位が有意ではない一方、下位であることが学校適応にマイナスの影響を及ぼすという結果からは、前項で指摘した地位欲求不満説についてどう考えられるだろうか。たとえば、成績上位者には成績が下位であることは関係ないが、上位であること自体が有意に影響していないなら、彼らの学校適応のありようはどのようなものなのか。この点をさらに探索するため、学業成績の違う集団の学校適応の規定因を検討した。学業成績の違う集団ごとに、学校適応を目的変数とし、上記の四変数から学業成績を除いたものを説明変数に重回帰分析を行った結果、まず成績上位者の場合、有意に影響を与え

ているのは、運動苦手 ($\beta = -0.050, p = 0.034$)、部活コミットメント ($\beta = 0.238, p = 0.000$) であり、運動が得意であることは有意ではなかった ($p = 0.509$)。次に、成績中位者の場合は、運動得意 ($\beta = 0.214, p = 0.001$)、部活コミットメント ($\beta = 0.227, p = 0.000$) であった。最後に、成績下位者の場合、運動得意 ($\beta = 0.183, p = 0.007$)、部活コミットメント ($\beta = 0.255, p = 0.000$) であった。ここから、第一に、部活コミットメントは学業成績の上下に関わらず影響を与えている一方、第二に、運動能力は成績上位者については苦手であることがマイナスの影響を、成績の中・下位者については得意であることがプラスの影響をそれぞれ与えていることが分かった。つまり、学校適応には、学業成績による一元的な地位欲求不満説だけでは説明しきれない過程があり、その過程では運動能力が一定の役割を担っているのである。

では、学校満足度や学校適応的な意識や態度の分化に関する知見をまとめよう。第一に、学業成績だけではなく、運動能力や部活コミットメントも規定因となっている。第二に、学業成績は下位であることが、運動能力は得意であることが影響を及ぼしている。第三に、学業成績、運動能力、部活コミットメントの三変数のなかでは、部活コミットメントの影響力が強い。第四に、運動能力が高いことは学業成績の中・下位の生徒たちにプラスの効果を持っており、学業成績に対する補償効果が示唆される。

3 配分：進路希望の分化

本項では、中学校における配分という側面から、進路希望の分化について検討する。中学校卒業後の進路について尋ねた設問を従属変数にして分化の規定因を探っていく³⁾。

進路希望と学業成績をクロス集計したところ、学業成績が上位の者の方が四年制大学への進学を多く希望しており、高卒後の就職や専門学校への進学といった進路希望は、成績が下がるに従って多くなっている ($n = 755, p = 0.000$)。この結果は従来の知見を確認するものである。では、運動能力や部活コミットメントについてはどうだろうか。

進路希望と運動能力をクロスさせたところ、有意な関連は見られなかった ($n = 759, p = 0.108$)。それに対し、進路希望と部活コミットメントは、部活動に力を入れていると答える者の方が四年制大学や短期大学への進学をより多く希望し、力を入れていないと答える者の方が、専門学校や高卒後就職を希望する者が多くなるとい

う相関が有意であった ($n=700$, $p=0.024$)。しかし、そこには学業成績が影響を及ぼしているかもしれない。そこで、進路希望と部活コミットメントのクロス表を学業成績で統制したところ、両者には有意な相関が見られなくなった (成績上位: $n=208$, $p=0.477$ / 成績中位: $n=251$, $p=0.407$ / 成績下位: $n=237$, $p=0.950$)。ゆえに、進路希望と部活コミットメントの相関は、背後で学業成績が両者に影響を及ぼしていたことになる。

では、進路希望の分化は学業成績のみで規定されているのだろうか。しかし、進路希望については、単にどの学校段階までを希望するかにとどまらず、中学生たちが進学先の学校に何を期待しているのか、あるいは、自らの進路をどうしていこうと考えているか、といった観点からの検討も必要だろう。なぜなら、進路希望の分化には、進路に対する中学生たちの主観的な意味づけの影響が想定されるからである。そこに部活動や運動能力といった学業成績以外の要因がどのように関連しているのかを検討しよう。

中学生にとってリアリティの大きな進路と考えられるのは高校進学である。そこでまず、高校に進学する際に重視する選択理由を尋ねた設問において、「やりたい部活があるかどうか」という選択肢を選んだかどうかを指標として考察した。進路希望と運動能力のクロス表を、「やりたい部活があるかどうか」で統制したところ、部活動を重視している群においてのみ、運動能力が高い方が四年制大学を多く希望し、運動能力が低い方が専門学校や高卒後就職を多く希望するという相関が有意であった (部活重視: $n=550$, $p=0.014$ / 部活非重視: $n=205$, $p=0.263$)。しかし、ここにも学業成績の影響が見られるかもしれない。そこで、学業成績によってサンプルを分割して検討してみた。その結果、学業成績の中位 (この場合、五段階の一番上と下を除いた群) において、上記のような相関が有意であった (部活重視: $n=442$, $p=0.038$ / 部活非重視: $n=162$, $p=0.112$)。

次に、部活動に参加することで得られることは何かを尋ねた設問における「進学や就職に役立つ」という選択肢を指標に検討した。進路希望と運動能力 (この場合、「得意」と「普通・苦手」の二段階に区分した群) のクロス集計表を、「進学や就職に役立つ」を選んだかどうかで統制した場合、役立つとした群には運動能力が高い方が進路希望も高くなるという相関が有意であった一方で、役立たないとした群には有意な相関が見られない (部活役立つ: $n=259$, $p=0.017$ / 部活役立たない: $n=431$, $p=0.437$)。また、学業成績によってサンプルを分割して検討した場合、学業成績の中位 (同上) におい

て、上記のような相関が有意であった (部活役立つ: $n=216$, $p=0.013$ / 部活役立たない: $n=341$, $p=0.613$)。

本項の知見をまとめると、第一に、進路希望に関してはやはり学業成績が大きな影響力を及ぼしていること、第二に、運動能力は基本的に、進路希望に直接影響してはいないものの、進学先選択に際して部活動を重視したり、部活動が進学や就職に役立つと考えていたりする場合に、学業成績が中位であり、かつ、運動の得意な者の進学アスピレーションに対して影響力を及ぼしているということが明らかになった。

C まとめと今後の課題

本章では、生徒文化と進路選択の分化が、学業成績以外だけではなく運動能力によっても規定されていること、部活へのコミットメントが学校適応に大きな影響を及ぼしていることを明らかにした。

今後はさらに分析を精緻化するとともに、学校内部での観察や聞き取りなどによって、生徒たちの分化の様相を捉えていく必要がある⁴⁾。

(藤田武志)

註

- 1) 学校の存立メカニズムに関する objective な契機と subjective な契機については荻谷 (1981) を参照。
- 2) それぞれの設問に対し、「とてもあてはまる」を1.5点、「まああてはまる」を0.5点、「あまりあてはまらない」を-0.5点、「まったくあてはまらない」を-1.5点として加算した。点数が高いほど向学校的であると考えられる。
- 3) ただし、「考えたことがない」「その他」という選択肢は分析の対象から外している。また、中卒後就職という選択肢も数が少ないために分析から除外している。
- 4) 今回の分析の射程には含んでいないが、学校外のユース・カルチャーによる生徒たちの分化を捉えていく必要もある。

IV 部活動における人間関係

A 課題の設定

本章では、中学生の人間関係に着目して、生徒の分化の規定要因を探索的に考察する。部活動という場において、中学生がどのような人間関係を結ぶのか、そしてその関係は中学生の学校生活にどのような影響を与えるのだろうか。

Coleman (1961) 以来、学校世界における生徒文化については、調査者ごとにいくつかのタイプに類型化がなされ、生徒の同輩社会の価値風土が単純ではないこと、そしてその同輩による集団はさらにいくつかの下位集団

に分裂し、それぞれ異なる価値パターンや集団規範を持つこと、が明らかにされてきた(白石 1985)。しかしたとえば部活動を念頭においた場合、白松(1996)が指摘するように、部活動の生徒集団への影響が高く予想されてきた反面、その影響や集団内での相互作用を明らかにする研究は進展してこなかった。白松は、この課題へアプローチするために生徒集団内の下位集団としてのクリーク(徒党集団 clique)やその準拠集団たるクラウド(仲間集団 crowd)などの小集団をとらえる概念を用いることを提起した¹⁾。

そこで本章では、部活動を媒介に生じると考えられる生徒のグループ分け、すなわち中学校生活における生徒の分化の一端を探索的に検討し、中学校生活に対する影響を明らかにすることを試みる。

B 生徒の分化の一規定要因

1 部活動を媒介とした友人関係―「部活仲間」

中学生が学校生活について期待することがらについては、これまでも、「友人とのおしゃべり」に代表されるような、友人との交流を上位にあげることが知られている。今回の調査でも、学校生活における充実度について、友だちとのおしゃべりが「とても充実している」あるいは「まあ充実している」とあわせて、91%が肯定的に回答した。学校生活全般の様子(Ⅱ-B-4)でみたようなインフォーマルな場面は、他の学業にかかわる場面や課外活動場面を引き離して高い数値で支持されており、生徒にとっての重要性は高いといえる。

では、部活動という場についてはどうであろうか。中学生は部活動にいかなる期待を寄せているのだろうか。部活動で得られるものはなにかとたずねたところ、全体の86.5%が「仲のよい友だち」をあげ、「好きなことが上達できる」をあげた83.7%をわずかながら上回った。このことから、中学生は部活動について、そこで行われる活動内容の習熟と同等かそれ以上に、友人との交流を期待していることがわかる。そこで、最も親しい人としてだれをあげたかに目を向けてみよう。すると、「ちがう部の自分の学校の人」(28.3%、全体比。以下同様)ではなく、「部の同学年の人」(65.2%)を6割以上の者があげており、部活動を通じた人間関係の中学校生活に占める比重の大きさがうかがえる(以下「部活動で知りあった他校生(1.9%)」「部の先輩(1.8%)」「部の後輩(1.0%)」とつづく)。

また、休みに遊びに出かける相手としてあげるのは、「部活動の同学年(54.5%)」「ちがう部の同学年(39.0%)」、電話でよく話す相手として「部活動の同学年(54.2

%)」「ちがう部の同学年(35.8%)」と差が表れており、部活動を介した友人の存在感は大きい。

では、友人関係は、部活動内でどのように働いているのだろうか。そこで、部活動中心の交友関係を志向するグループ(一番親しい人として、「部の先輩」「部の後輩」「部の同学年」「部活動で知り合った他校の生徒」をあげた生徒)を「部活仲間」群と呼ぶことにし、部活動とは関係のない友人を志向するグループ(「ちがう部活動の自分の学校の生徒」を一番親しい人としてあげた生徒)の「非部活仲間」群に整理しなおし、分析をすすめる。

部活動においていちばん楽しいことについて、「練習や活動」「試合やコンクール」をあげたものを、活動内容を重視した群としてくくり、「友だちとのおしゃべり」をあげたものと対置させて、二群に分けた。この二つと先の部活仲間・非部活仲間とのクロス集計で関係を調べると、部活仲間群は、部活動に対して活動内容をより志向する(部活仲間/非部活仲間:57.8>50.7)のに対し、非部活仲間群は、おしゃべりを志向し(42.2<49.3)、10%水準ではあるが相関が有意であった(表Ⅳ-1)。

表Ⅳ-1 部活仲間を独立変数としたクロス表

いちばんの楽しみは?	いちばん親しいのは?		合計
	非部活仲間	部活仲間	
おしゃべり	105	235	340
%	49.3	42.2	44.2
活動・試合	108	322	430
%	50.7	57.8	55.8
計	213	557	770

n=770, p=0.076

中学生は原則として全員部活に参加している。重要な点は、なかでも部活仲間群が活動内容を重視するということである。

2 形態による部活動集団の分別

このような部活仲間群が、部活動という場を基盤にした人間関係の表出である以上、部活動の何らかの特性が規定していると考えられる。そこで部活動の活動形態に着目し、五つの指標に分けて部活動の諸特性との関係を考える。

一番目に、「運動系部活動」「文化系部活動」(以下「運動」「文化」と略す)。いわゆるスポーツ、運動競技系の

部活動と、芸術系や言語系の活動を中心とした非スポーツ系としての文化部という分け方である。運動競技か非運動競技かによって、部活仲間の形成に影響するののかという点を考える。二つめは「男子部／女子部」(以下「男子／女子」)。性差による友人関係の作り方を考慮に入れる。三つめは、「チーム活動／個人活動」(以下「チーム／個人」)。対外競技やコンクールであつかわれる範疇分けをもとに、チームや集団での活動なのか、個人主体の活動なのか、という分け方を考慮した²⁾。集団競技など、チームワークを要するとされる活動と、個人で結果や記録を出す活動とで集団のつくられ方に違いは生じるかという点から考える。第四に、「土曜・日曜まで活動／平日のみ」(以下「休日／平日」)。生徒の回答をもとに、各部ごとに活動日の平均値を算出し、数値(=申告日数)が5以下(週五日まで)と5より上(土、日も活動)の群に分類した。接触時数の多少による影響を考慮に入れることと、より多く参加していることに帰因して、学校以外の生活時間が少なくなるという側面を考慮している。そして五番目は「ブロック大会以上に入賞・進出／ブロック大会参加程度」(以下「入賞／参加」)。部活動の成果・成績として、各ブロック大会(地区・支部大会)以上に進出したかどうかで分別した³⁾。成績や結果を出す活動のなかで、仲間意識や結びつきに影響はみられるのだろうか。

これら五つの指標の各群の実数・比率は次の通りである(人数・全体比)。「運動(541人・59.3%)／文化(264人・28.9%)」「男子(435人・47.7%)／女子(395人・43.3%)」「チーム(542人・59.4%)／個人(263人・28.8%)」「休日(234人・25.7%)／平日(594人・65.1%)」「入賞(326人・35.7%)／参加(253人・27.7%)」。

3 部活動の形態による部活仲間への影響

では、このような部活動の形態が、いかに部活動の友人関係に影響するのだろうか。そこで、これらの五つの部活動の形態を説明変数とし、それらが部活仲間を一番親しい相手に選ぶかどうかという目的変数に対して独自に与える影響力を見るために、重回帰分析をおこなった。

表IV-2から、入賞する部活であることと、チーム活動の部活であることの二つは、部活仲間を志向することに対して有意な影響力が認められた。また、有意水準を10%にすれば、休日まで活動するかどうか、影響していることが分かる。

この三つの規定因のなかで、もっとも大きな影響力を

表IV-2 部活仲間を目的変数とした重回帰分析

	標準化係数	有意確率
入賞／入賞ダミー	0.182	0.000
チーム／チームダミー	0.103	0.016
休日／休日ダミー	0.085	0.055
男子／男子ダミー	0.071	0.119
運動／運動ダミー	0.024	0.605

$R^2=0.080$, $p=0.000$

持っているのは「入賞」である。おそらくブロック大会以上に進出した部については、その活動を共有した友人(=部活仲間)を一番親しい友人にあげるという影響が考えられる。また「チーム」活動であることも、部活仲間形成に影響が強い。一方「休日」については若干弱く、その単独での影響力よりも、入賞如何という成果やチームか個人かのちがいと相通じることによって影響してくると考えたほうがよさそうである。その詳細については、さらなる分析が課題として残された。

これらの三つの要因が部活仲間志向に影響力を及ぼしていることは分かったが、それら以外の要因はどのように関わっているのだろうか。まず、「休日」と「部活仲間」のクロス表を男女差で統制すると、男子にのみ有意な相関がみられた。つまり、男子であれば、土日まで練習をすることが部活仲間を志向することに結びつくが、女子は土日まで練習するかどうかは左右しないということになる。この女子にまつわる問題は、後でまとめて考察する。

次に、「チーム」と「部活仲間」のクロス表を「運動」で統制したところ、運動部について10%水準ながら有意な相関がみられた($p=0.083$)。すなわち、運動部は、チーム活動であることが部活仲間志向を示しうるといえる。また「男子」で統制してみると、男子部でのみ10%水準($p=0.082$)ながら相関がみられた。このことから、女子はチーム・個人によって部活仲間を志向するかどうかはわからないことになる。

女子にまつわる問題は部活動の内容から考えて、単なる男女の性差にのみ帰因しているとは考えにくい。なぜなら、「休日」と「部活仲間」という相関に対し、「運動」の統制によって、運動部では有意な相関が残ることに着目すると、女子にとっての運動部の選択肢の少なさが文化部への比率を高め、同時に文化部が個人的活動である比率が高い(文化部全28種中22種、78.6%が個人的活動に分類された)ことに帰因していると考えられるか

らである。

よって、これらの関係は次のように導き出される。部活動においては、チームで活動する部なのかどうかということと、休日まで活動するかどうか、またブロック大会以上に入賞する部であるかどうか、これらが部活動において生徒たちに部活仲間を志向させることに結びついている。ただし、女子については、部活動仲間志向の傾向がとらえにくく、さらなる分析が必要である。

本節では、単に、運動部か文化部かといった最もなじみの深い指標ではなく、活動の形態如何によって、そのなかでの部活仲間を志向するかどうか規定されるということが暫定的ながら確認できた。

4 部活仲間の学校文化との関係

では、この部活仲間は、いかに中学生の学校生活に影響を及ぼすのだろうか。学校生活にまつわるさまざまな局面、学校生活や部活動に対する意識や価値観、について、部活仲間志向群・非部活仲間志向群のちがいによって現れてくる特徴を記述していく。以下、断らない限り、部活仲間志向群について相関がみられた項目についての考察である。

部活仲間群は、部活に関してどのような態度を示すのだろうか。「部活動をやめたいと思ったこと」については、負の相関を示し、「サボるのはよくない」と思っている。もちろん「部活動には充実感」を覚え、「参加は7割以上」であり、「部活コミットメント」は高い。さらに「卒業後も同じ活動を続ける」つもりでいる。つまり、部活動に対して、順応し、是認している態度がみられる。

部活動に対する期待については、「友だちが得られる」し、「からだ」「こころ」ともに鍛えられ「礼儀正しくなれる」と考えている。通俗的に語られがちな部活動での教育効果をほとんど認めている。先と同様、部活動是認の態度の一端が表れている。

その傾向は中学卒業後の意向にも反映し、「行きたい高校にやりたい部活動があるかどうか」を大事だとするし、「高校の選択に部活動の先輩がいるかどうか」も選択の指標として支持されている。部活動が進路選択の際の一つの手がかりとして効いていく可能性が示されているのがわかる。

対教師関係について彼らは、「親しみを感じる先生」として担任よりも顧問の教師をあげる。顧問に対して「気軽に話すことができ」、部活動を通じて「先生と仲良くなれる」と感じている。これら、部活動顧問に対する肯定的態度が特徴的である。一方で、「部活動の成績が顧

問によるかどうか」は別問題だととらえており、むしろ努力の量や生まれつきの才能をあげる度数が大きい。「顧問に対する満足度」については相関しなかった。

学校生活全般について総じてみると、彼らは、「テスト前の勉強」に取り組み、「勉強との両立は大切」だと思っている。「学校に対する満足度」は相関しないが、「学校へ行きたくないと思ったことがある」については負に相関することから、学校に満足はできていないが、学校という場に行きたくなくなる別要因が存在すると予想される。その一つが友人との交流である可能性がある。学校適応として、上記のような場面について相関を示すということは、彼らが学校に対して、潜在的に支持する階層を形成していると考えられる。

最後に、逆に相関を示さなかった項目について言及しておく。部活仲間志向はいかなる成績の分け方についても相関しなかった点が特筆される。さらに彼らには「がんばればなんでもできる」といった頑張り信仰もみられない。部活仲間は学業成績での上中下位にかかわらず、志向される存在である。

C まとめと課題

中学校生活において、部活動における友人との交流に着目することから出発し、中学生たちが形成する集団を部活仲間と呼んでとらえ、部活動や学校の諸側面との規定関係を明らかにしようと試みた。

部活仲間は、その活動内容が集団（チーム）によって行われるかどうか、そして、その活動の成果としての成績（ブロック大会以上に入賞・進出）如何によってより形成されやすくなることが示唆された。つまり、結果として、部活動といった場合に運動系部活・文化系部活という通念的にとらえられる分類枠ではなく、各部活動の内容に着目した上で、そこでの中学生の集団形成を探る必要があるだろう。

この部活仲間について、彼らが積極的ではないにせよ、学校に対し適応的であり、部活動に対して積極的にコミットし、部活動そのものを是認してとらえているという特性が整理されたが、このことが、直に、部活動が無反省に推奨したり推進することに結びつけるものではないことを付記しておく。質問紙による調査によって、少なくとも実態としてそのような生徒の分化がうかがえたことは確かである。それがあつた種の学校適応の型を示している以上、部活動の果たす中学校生活に対する意味は見逃せない。

今後、この部活仲間志向について、さらに具体的でミクロな場面について分析、考察を加えていくことが課題

として残されている。中学生の部活動への参加・適応の過程や日々の活動を観察研究などによって補いながら、手がかりを模索していく。

最後に、今回の報告では部活動における対教師関係を綿密に検討できなかったことを断っておく。顧問教師という存在は、生徒の部活動に対するコミットメントに影響力が高いことは今回の質問紙調査の結果からも端的にうかがえたのだが、その規定関係をより正確に位置づけるためのデータや考察が整わなかったことが今回課題として残された。また、先輩・後輩関係についても、考察を進めていくなかで、さらに十分な考察に耐えうるだけのデータが集められなかった。対教師関係と併せて、今後の課題としたい。

(矢野博之)

註

- 1) ただし白松も、クリークやクラウドは、アメリカの若者社会において、生徒によって名付けられ、容易に知覚できる実態として存在するものであり、日本の実状とは異なる点に留意している。
- 2) 「チーム競技」「個人競技」については、以下のように振り分けた。格技や個人戦・団体戦両方ある部についても、チーム戦を伴うことからチーム競技に振り分けた。
「チーム競技」：野球、サッカー、バスケット、バレーボール、卓球、剣道、柔道、ソフトボール、バドミントン、テニス、ワンゲル、ソフトテニス、吹奏楽、マンドリン、合唱、演劇、映画、放送
「個人競技」：陸上、水泳、ザ・トレーニング、フライフィッシング、英語、科学、科学模型、技術、工作、手芸、美術、美術工芸、イラスト、料理、ホームメイキング、茶道、華道、郷土史、読書、パソコン、ワープロ、文芸、囲碁・将棋、ボランテニア、写真、料理
- 3) 東京都の場合、東京23区の個々に行われる区大会があるが、その上位大会として複数の区を合わせたブロック大会が開催され、都大会とのあいだに位置づく。区大会レベルは原則的にオープン参加が見込まれる自由参加であるのに対し、ブロック大会以上は、その成績如何で進出如何が決定する。文化系部活動は、区大会・地区大会までは自由参加で、その上位大会としていきなり都大会・全国大会であることが多い。

V 家庭環境と部活動—スポーツ・文化的活動への関わり方に対する影響を中心に—

A 問題の所在

本研究では、生徒の分化の問題を扱うにあたって、学業成績とは別の諸側面に注目することも重要であるという発想のもとで、部活動に着目して検討をすすめている。本章では、生徒の分化の諸側面のひとつとして、部活動への関わり方の分化の問題を、家庭環境からの影響との関わりを中心に探索的に検討することを試みる¹⁾。

中学校の部活動は、そのほとんどがスポーツ・文化的活動としての側面を持っているといえる。スポーツや文化的活動への関わり方の分化には、出身家庭のありようが関わっていることが知られている。スポーツに関しては、親の職業や学歴、スポーツ活動への志向性が、子のスポーツへの関わりを促す要因であることが繰り返し指摘されてきた(たとえば、桑野・池田・山口 1979, 多々納・厨 1980)²⁾。また、その関連のありようが、出生順位によって異なっているとの指摘もなされている(海老原・畑・池田・宮下 1982)。他方、文化的活動に関しても、文化的活動の出身家庭との関連、文化的活動の世代間継承が明らかにされてきた(藤田・宮島・秋永・橋本・志水 1987, 宮島・藤田編 1991, 藤田・宮島・加藤・吉原・定松 1992)。中学生にとって、スポーツや文化的活動に参加する機会として、学校の部活動・クラブ活動が占める位置は小さなものではないと考えられる。特にスポーツに関してみれば、学生や社会人について、彼らのスポーツへの関わり方の分化には、学校時代の部活動・クラブ活動経験のありようが、スポーツへの関わりを促進する重要な要因になっていることも指摘されている。

しかし、ここでは部活動が学校で組織化されていることがスポーツ・文化的活動への関わり方に対する家庭環境からの影響にどのような効果を持っているかが明示的に問われることはなかった。部活動は家庭環境による差異を拡大しているのか、それとも縮小しているのか、あるいは差異に関しては影響を与えないのか。これは部活動が学校で組織化されていることの意味を考えるうえで重要な問題のひとつであると考えられる。

本章ではまず、家庭環境のありようが、部活動というかたちでのスポーツ・文化的活動への関わり方に、どのような影響を与えているかを検討する。また、その関連のありようが、スポーツと文化的活動とでどのように異なっているのか、部活動への参与の仕方によってどのように異なっているか、を検討することによって、スポーツ・文化的活動の継承に対する、学校の役割を検討する。

B 家庭環境とスポーツ・文化的活動への関与

1 部活動というかたちでのスポーツ・文化的活動への参与

まず、部活動というかたちでのスポーツ・文化的活動への参与が、家庭環境のありようによってどのような影響を受けているかを検討する。先述のように今回の調査対象校は部活代替の仕組みを採用していた。そのため部

への加入（非加入そのもので、スポーツ・文化的活動への関わり方の違いを判別することは妥当ではない。そこでここでは便宜的に、全体を部の活動に参加する頻度が高い者と低い者の二つに分ける。そして、部の活動に参加する頻度が高い者を部活動に実質的に参与している者と仮定し、スポーツ・文化的活動への参与について検討する³⁾。表V-1は家庭環境のさまざまな側面と部の活動に参加する頻度との関連を見たものである。A-1~4は、部でやっている活動と同じことをしている人が身近にいるかどうかを見たものであり、B-1~6は、保護者の行動を見たものである。このうち、A-1~4については、運動部・文化部の違いに関わりなく、生徒のスポーツ・文化的活動への関わり方に影響を及ぼすと考えられる。Bの保護者の行動のうち、学校行事や部活動に対して支援する度合い（B-1, 2）も同様である。これに対し、保護者の直接および間接のスポーツ参与（B-3, 4）が影響を与えるのは、運動部についてであると考えられる。同様に、保護者の直接・間接の文化的活動（B-5, 6）は文化部について影響があると考えられる。

まず、運動部・文化部の違いに関わりなく関連があることが予想されるA-1~4, B-1, 2について検討

する。表によれば、部の活動への参加頻度と関連が見られるのは、保護者が「学校の行事・授業参観に来る」、「部活動の大会や・コンクールに来る」である。つまり、モデルとなる者が身近にいるかどうか部活動への参加頻度に影響を与えているとはいえないが、保護者の学校行事や部活動への支援の度合いは影響を持っていることがわかれる¹⁾。

次に、保護者のスポーツ・文化的活動への一般的な関与について検討する。先述のとおり、運動部・文化部のそれぞれについて関連の予想される項目を用意したが、実際に関連が認められたのは、運動部について関わりがあると想定したものだけであった。表によれば、保護者が「スポーツをする」、「実際にスポーツを見に行く」ことが比較的高いと答えた者の方が、部の活動への参加頻度が高くなる傾向が認められる。つまり、運動部については、保護者の直接・間接のスポーツ参与が高い者ほど、部の活動への参加頻度が高くなる傾向があるのに対し、文化部については、保護者の文化的活動は直接的なものも間接的なものも、部活動への参加頻度の高低に影響を与えていないことが分かった。スポーツに関しては、世代間の継承性が認められるのに対し、文化的活動一般に関しては、部活動というかたちでの参与として

表V-1 家庭のスポーツ・文化的活動への志向性と部の活動への参加頻度

	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	
	保護者がやっている	兄や姉がやっている	親戚がやっている	近所の人やっている	来る 学校の行事・授業参観に	部活動の大会やコンクールに来る	スポーツをする	実際にスポーツを見に行く	絵を描いたり楽器の演奏や合唱をしたりする	美術展や音楽会に行く	
部の活動への参加頻度	a ₁	57.7%	60.6%	58.8%	62.8%	57.5%	73.6%	72.3%	71.8%	37.5%	39.8%
	b ₁	53.6%	53.1%	53.4%	52.8%	43.3%	41.2%	57.1%	59.1%	39.7%	38.3%
	c ₁	1.18	1.36	1.25	1.51	1.77**	3.98**	1.96**	1.76**	0.91	1.07

注1) a₁はA-1~4に関しては「やっている」、保護者がB-1~6のことをすることがあるかという質問に関しては「よくある」「ときどきある」と回答した者のうち、部の活動にどれくらいの頻度で参加しているか、という質問に、「ほとんど毎回参加」していると回答した者の割合。以下同様。

b₁はA-1~6に関してはやっていない、保護者がB-1~6のことをすることがあるかという質問に関しては「ほとんどない」「まったくない」と回答した者のうち、部の活動にどれくらいの頻度で参加しているか、という質問に「ほとんど毎回参加」していると回答した者の割合。以下同様。

c₁はオッズ比 (a₁ × (1 - b₁)) ÷ b₁ × (1 - a₁)。以下同様。

注2) ※は5%水準で有意。**は1%水準で有意。以下同様。

注3) B-3, 4については運動部員のみ、B-5, 6については文化部員のみ。以下同様。

は、それが認められないということである。

2 中学校卒業後も部の活動を継続する意欲について

現在部の活動に参加する頻度が高いかどうかだけでなく、中学校卒業後も現在所属している部の活動を続けたいと思うかどうかにも、家庭環境の違いによる差異が見られるかを検討する。中卒後もその活動を続けたいと思う者ほど、そのスポーツ・文化的活動への関与が高いと考えることができる。またこの意欲は、不確定であるのはもちろんであるが、将来的なスポーツ・文化的な活動への関わり方の分化にも関わる一要素であると考えられるともいえよう。

先述と同様の事情から、まず A-1~4, B-1, 2 について検討する。表 V-2 によると、部の活動と同じことを「保護者がやっている」、「兄や姉がやっている」と答えた者ほど、中卒後も部の活動を継続する意欲が強いことが確認できる。先に見たスポーツ・文化的活動への参与の場合とは異なり、モデルとなる者が身近にいるかどうか部の活動を継続する意欲に影響を与えていることがうかがわれるのである。この違いが生じることの一つの解釈としては、中学校卒業後も現在所属している部の活動を続ける意欲が強いということは、特に現在の部の活動に関与しているということであり、その関与は

家庭環境の特定の活動への志向性に影響を受けるためではないかと考えられる。

また、保護者が「学校の行事・授業参観に来る」、「部活動の大会や・コンクールに来る」ことが相対的に多い者の方が、中卒後も部の活動を継続する意欲が強いことも確認できる。保護者の部活動や学校行事への支援の度合いも、上記と同様、中学卒業後も部の活動を継続する意欲と関連が認められるのである。

続いて、先ほどと同様に、運動部・文化部のそれぞれと関連があることが予想される、保護者のスポーツ・文化的活動への参与の度合いについて検討する。同じく表 V-2 によると、運動部については、保護者が「スポーツをする」、「実際にスポーツを見に行く」ことが相対的に多い者ほど、中卒後も現在所属している部の活動を継続したいと考える傾向が強い。つまり、保護者の直接・間接のスポーツ参与の度合いが高い者ほど、中学卒業後も現在所属している運動部を継続したいと考える傾向がうかがわれるのである。これに対し文化部についてみると、保護者が「絵を描いたり楽器の演奏や合唱をしたりする」ことが比較的高い者が、中卒後も部の活動を継続したいと考えるという傾向は認められない。間接的な文化的活動への参与の程度について部の活動を継続する意欲の間に関連が認められないだけでなく、保護者の直接

表 V-2 家庭のスポーツ・文化的活動への志向性と中学校卒業後も部の活動を継続する意欲

	A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6
	保護者がやっている	兄や姉がやっている	親戚がやっている	近所の人がやっている	学校の行事・授業参観に来る	部活動の大会やコンクールに来る	スポーツをする	実際にスポーツを見に行く	絵を描いたり楽器の演奏や合唱をしたりする	美術展や音楽会に行く
中学校卒業後も部の活動を続けた	a ₂	b ₂	c ₂							
	69.0%	66.3%	54.1%	58.1%	53.2%	64.2%	59.8%	61.3%	35.9%	43.4%
	49.7%	49.4%	51.1%	50.6%	44.2%	43.0%	49.4%	50.3%	53.8%	52.3%
	2.25**	2.02**	1.13	1.35	1.44*	2.38**	1.52*	1.57*	0.48*	0.70

注)

a₂は、A-1~4に関しては「やっている」、保護者がB-1~6のことをすることがあるかという質問に関しては「よくある」「ときどきある」と回答した者のうち、中学校卒業後も、現在所属している部の活動を続けたいか、という質問に、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合。

b₂は、A-1~6に関してはやっていない、保護者がB-1~6のことをすることがあるかという質問に関しては「ほとんどない」「まったくない」と回答した者のうち、中学校卒業後も、現在所属している部の活動を続けたいか、という質問に、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合。

c₂はオッズ比 (a₂ × (1 - b₂)) ÷ b₂ × (1 - a₂)。

的な文化的活動の度合いが高い者については、むしろ中卒後は部の活動を継続したくないと考えるという傾向が見られるのである²⁾。つまり、運動部加入者については、部の活動への参加頻度について確認されたのと同様、保護者のスポーツ参加の度合いが高いほど部の活動を継続する意欲もまた高くなる。他方で、文化部加入者については、保護者の文化的活動の度合いが部の活動を継続する意欲に与える影響を見ると、関連が認められない、あるいはむしろ逆にその意欲を抑えるといういわば負の効果があることが認められるのである。

3 出生順位とスポーツ・文化的活動の世代間継承

次に、ここまで検討してきた、部活動というかたちでのスポーツ・文化的活動への参与と家庭環境との関連のありように、出生順位によってどのような違いが見られるかを検討する。スポーツへの参与については、長子・一人っ子は親からの影響を強く受けるが、中間子・末子

は「親離れ」の現象が認められるという報告がある（海老原・畑・池田・宮下 前掲）。これは、スポーツへの参与の（あるいは文化的活動の）世代間での継承には、家族での位置に応じた差異があるということを示唆しているといえる。これを検討するため、表V-3は「長子・一人っ子」と、「中間子・末子」とに分けて、家庭環境とスポーツ・文化的活動への参与との関連を見たものである。

まず、部の活動への参加頻度に関して検討する。先述のとおり、スポーツ・文化的活動への参与と統計的に有意な関連が認められたのは、学校行事や部活動への支援の度合い、運動部に関しては保護者の直接・間接のスポーツ参加であった。これらについて、オッズ比によって「長子・一人っ子」である場合の関連の強さと「中間子・末子」である場合の関連の強さを比較すると、部活動への支援の度合いを除けば、非長子の方に強い関連が認められる。つまり、例外はあるものの、「長子・一

表V-3 家庭のスポーツ・文化的活動への志向性と、部の活動への参加頻度、および、中学校卒業後も部の活動を継続する意欲（出生順位別）

		A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	
		保護者がやっている	兄や姉がやっている	親戚がやっている	近所の人やっている	来る 学校の行事・授業参観に	部活動の大会やコンクールに来る	スポーツをする	く 実際にスポーツを見に行	や合唱をしたりする 絵を描いたり楽器の演奏	美術展や音楽会に行く	
部の活動への参加頻度	長子・一人っ子	a ₁	47.4%		51.4%	51.1%	54.0%	72.3%	64.4%	65.7%	34.5%	38.9%
		b ₁	52.9%		52.5%	52.5%	46.5%	38.0%	58.5%	58.7%	41.3%	40.0%
		c ₁	0.80		0.96	0.95	1.35	4.26**	1.28	1.35	0.75	0.95
	中間子・末子	a ₁	69.7%	61.8%	63.8%	72.9%	60.6%	74.7%	79.2%	77.3%	38.2%	39.1%
		b ₁	54.4%	54.4%	54.5%	53.4%	41.4%	44.0%	56.3%	59.7%	38.2%	36.7%
		c ₁	1.93	1.36	1.47	2.35	2.18**	3.76**	2.96**	2.30**	1.00	1.11
中学校卒業後も部の活動を続けた	長子・一人っ子	a ₂	65.8%		54.1%	66.7%	54.0%	70.2%	62.5%	67.6%	41.4%	44.4%
		b ₂	53.7%		55.0%	53.3%	55.2%	44.1%	52.0%	51.2%	58.7%	58.8%
		c ₂	1.66		0.96	1.75	0.95	2.99**	1.54	1.99*	0.50	0.56
	中間子・末子	a ₂	72.7%	66.2%	55.3%	51.1%	52.5%	59.0%	57.4%	55.4%	32.4%	43.5%
		b ₂	46.6%	45.3%	47.8%	48.3%	36.4%	41.9%	47.1%	49.3%	49.5%	46.2%
		c ₂	3.05**	2.36**	1.35	1.12	1.93**	2.00**	1.51	1.28	0.49	0.90

人っ子」よりも「中間子・末子」の者の方が、スポーツ・文化的活動への参与について、身近にいてモデルとなる者の影響を強く受けている可能性が示唆されている。

次に、中卒後も部の活動を続ける意欲について検討する。これに関して、スポーツ・文化的活動への参与と統計的に有意な関連が認められたのは、モデルとなる保護者・兄弟がいるかどうかと、学校行事や部活動への支援の度合い、保護者の直接・間接のスポーツ参与（運動部に関して）、保護者の直接的な文化的活動への参与（文化部に関して）であった。これらについても、オッズ比によって、「長子・一人っ子」の場合と「中間子・末子」の関連の度合いを比較すると次のことを指摘できる。第一に、文化部について、部の活動への参加頻度と保護者の直接的な文化活動への参与との間の関連には、出生順位による違いはほとんど見られない。第二に、保護者の部活動への支援の度合いと運動部についての保護者の間接スポーツ参与については、「長子・一人っ子」の方がスポーツ・文化的活動への参与に関して家庭環境の影響を強く受けている可能性があるものの、これら以外については、「中間子・末子」の者の方が、スポーツ・文化的活動への参与について家庭環境の影響を強く受けていることがうかがわれる。

これらの知見をふまえるならば、少なくとも部活動というかたちでのスポーツ・文化的活動への参与に関して

は、中間子・末子に「親離れ」現象が認められるとはいえないであろう。そして、家庭環境とスポーツ・文化的活動への参与の関連には、出生順位による差異があり、しかもむしろ、「中間子・末子」の方が、「長子・一人っ子」よりも家庭環境の影響を強く受けている可能性が示唆されている。

C 家庭環境との関わりからみた部活動の位置

上で見たように、中学生についても、スポーツ・文化的活動への関与のありようは、これまで繰り返し指摘されてきたように、家庭環境によって分化している側面があることが確認された。他方で、はじめに述べたとおり、スポーツ参与に関しては、学校での部活動・クラブ活動の経験がその促進要因であることが指摘されてきている。今回の調査結果でも、部活動への参加の度合いと、中卒後も部の活動を継続する意欲との関連をみると、両者の間の関連が確認された⁶⁾。

そこで次に、部活動への参加の度合いの違いによって、スポーツ・文化的活動への関与と家庭環境の関連のあり方に違いが見られるかを検討する。そして、そのことを通じて、部活動の意義について考察する。学校で部活動が組織化されていることは、家庭環境のスポーツ・文化的活動への志向性との関係でみたとき、中学生のスポーツ・文化的活動への関与にどのような影響を与えているのだろうか。部活動への参加状況に関わらず、家庭

表V-4 家庭のスポーツ・文化的活動への志向性と中学校卒業後も部の活動を継続する意欲（部の活動への参加頻度別）

		A-1	A-2	A-3	A-4	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6
		保護者がやっている	兄や姉がやっている	親戚がやっている	近所の方がやっている	来校の行事・授業参観に	部活動の大会やコンクールに来る	スポーツをする	実際にスポーツを見に行く	絵を描いたり楽器の演奏や合唱をしたりする	美術展や音楽会に行く
中学校卒業後も部の活動を続けた	部の活動への参加頻度高	a ₂ 70.7%	73.7%	65.3%	60.3%	63.0%	69.7%	65.4%	65.3%	54.2%	63.6%
		b ₂ 61.9%	61.0%	62.4%	63.1%	60.9%	56.1%	60.1%	61.3%	67.5%	65.7%
		c ₂ 1.49	1.79	1.13	0.89	1.09	1.80**	1.25	1.19	0.57	0.91
	部の活動への参加頻度低	a ₂ 66.7%	54.1%	40.0%	54.3%	39.8%	48.8%	44.2%	50.0%	25.0%	30.0%
		b ₂ 35.8%	36.6%	38.2%	36.7%	32.0%	34.0%	35.2%	34.2%	45.3%	44.4%
		c ₂ 3.59**	2.04*	1.08	2.05*	1.40	1.85*	1.46	1.92	0.40**	0.54

環境のスポーツ・文化的活動への志向性は、同じ様な効果を中学生に及ぼしているのだろうか。先ほどと同様、部の活動に参加する頻度が高い者を部活動に実質的に参与しているものと仮定する。部の活動に参加する頻度が高い者と低い者を分け、家庭環境とスポーツ・文化的活動への関与との関連を見たのが表V-4である。

まず、保護者が「学校の行事・授業参観に来る」、「部活動の大会や・コンクールに来る」と部の活動を継続する意欲との関連の度合いをオッズ比でみると、部活動に参加する頻度が高い者の場合も、低い者の場合も、両者をまとめて見たとき（表V-2を参照）よりも低くなっている（もっとも、「学校の行事・授業参観に来る」については、部の活動への参加頻度で統制したことで、クロス表中の総度数が小さくなったこともあってか、統計的に有意な関連は認められなくなっている）。つまり、家庭環境と中学卒業後も部の活動を継続する意欲の関連は、その一部分が部活動によって媒介されていると考えられるということである。

これに対し、同じく表V-2および4によれば、「保護者がやっている」、「兄や姉がやっている」については、部の活動に参加する頻度が高い者については関連度が弱くなる一方、参加頻度が低い者については関連の度合いが高くなっている。「兄や姉がやっている」については両者の違いがあまりあるとはいえないものの、「保護者がやっている」についてはその違いが比較的大きいといえる。つまり、少なくとも、モデルとなる保護者がいるかどうかで中学生のスポーツ・文化的活動への関与に及ぼす影響は、部の活動に参加する頻度が高い者と低い者とで、そのあり方が異なっているということである。そして、部の活動に参加する頻度が高い者よりも、低い者の方が、家庭環境とスポーツ・文化的活動への関与との関連が強いということである。

次に、保護者のスポーツ・文化的活動への参与の度合いと生徒のスポーツ・文化的活動への関与との関連について検討する。運動部に関わると想定した項目（「スポーツをする」、「実際にスポーツを見に行く」）については、部活動参加頻度の高低に関わらず、両者の関連は、統計的に有意とはいえない。ただし、ここでもクロス表中の総度数が小さくなっていることを考慮して、次のこと指摘しておきたい。部の活動に参加する頻度が高い者のオッズ比と低い者のオッズ比を比べてみると、「スポーツをする」についてはほぼかわらないが、「実際にスポーツを見に行く」については、部の活動に参加する頻度が高い者よりも、低い者の方が、保護者のスポーツ参与と生徒のスポーツへの関与との関連が強い可能性が

あるということである。文化部については、部活動参加頻度が低い者の方でだけ、保護者の文化的活動への参与の度合いと生徒の文化的活動への関与との間に有意な関連が残っており、オッズ比の比を見ても部の活動に参加する頻度が高い者よりも、低い者の方が、保護者の文化的活動への参与と生徒の文化的活動への関与との関連が強いことが分かる。ただし、先に見たとおり、文化部の場合は両者が負の関係にある。

最後に、表V-2で全体として見た場合には中卒後も部の活動を継続する意欲と関連が認められなかった「近所の人ややっている」に関しても、部活動への参加頻度が低い者についてだけは統計的に有意な関連が認められることを指摘できる。

これらだけから明確な結論を導くことには慎重でなければならぬが、一つの解釈としては、次のように考えることができる。一方で、中学生のスポーツ・文化的活動への関わり方（中学校卒業後も活動を継続する見込みも含め）は、家庭のスポーツ・文化的活動への志向性の影響を受けており、部活動がそれを媒介している側面がある。他方で、部活動に参加する頻度が低い場合には、促進要因のある家庭の出身かどうか重要になる。これに対して、部活動に高い頻度で参加することで、促進要因がない家庭出身の生徒の場合でも、スポーツ・文化的活動への関与が促されるのである。

D まとめと課題

以上本章では、家庭のスポーツ・文化的活動への志向性と中学生のスポーツ・文化的活動への関与との間の関連を検討し、その関連のありようが出生順位によってどのように異なっているか、また、その関連のありように、学校で部活動が組織化されているということがどのような関わりを持っているか、を検討してきた。

本章の知見から示唆されることは、以下のようにまとめられる。第一に、部活動には、家庭環境と生徒のスポーツ・文化的活動への関与の関連を媒介している側面がある。それと同時に第二に、部活動がスポーツ・文化的活動との関わり方に独自の作用を及ぼしている側面があることもうかがわれた。つまり、部活動が学校で組織化されることによって、スポーツや文化的活動への関わり方にみられる家庭環境による差異が縮減されているということである。

ただし、中学校以前の段階でのスポーツ・文化的活動との関わり方について、十分な検討が加えられていない。また、今回の調査対象が中学校段階の生徒であり、これ以後の段階での彼らのスポーツ・文化的活動との関

わり方は、先行研究や本章の知見からまったく予測できないわけではないものの、不確定の部分が多い。本章で探索的に検討してきた部活動の位置についての検討を精緻化するとともに、彼らの将来の生活パターンやスポーツや文化的活動への関わり方との関連を、個々の種目・活動での差異をも視野に入れながら検討することが今後の課題である。

(荒川英央)

註

- 1) もちろん、部活動への関わり方を扱うことで、スポーツ・文化的活動への関わり方を一般的に論じることはできない。本稿は、この意味で限界がある。
- 2) Kenyon (1970) 以来、「スポーツへの社会化」研究として蓄積されてきた知見については、日本での成果も含め、山口・池田 (1987) のまとめがある。
- 3) 放課後の部の活動に、どれくらい参加しているかに、「1. ほとんど毎回参加…2. …3. 半分くらい参加…4. …5. ほとんど参加しない」の5肢で回答を求めた質問に、「1. ほとんど毎回参加」と回答した者を「部の活動への参加頻度が高い者」とした。
- 4) これについては、逆の因果関係を想定することも可能である。
- 5) 文化部といっても、その活動の内容は多岐にわたっている。そこで、家庭の文化的活動への志向性を捉えるための設問と密接に関わると考えられる文化部（プラスバンド・吹奏楽部・マンドリン部・合唱部・美術部・イラスト部）の部員だけを取りだし、同じようにクロス集計を行った。しかし、サンプル数が少ないためか、統計的に有意な関連はみられないものの、文化部全体についての結果とほぼ同様の傾向が確認された。
- 6) 中学卒業後も部の活動を続けたいかどうかに肯定的に答えた者（表V-2の注を参照）の割合は、部の活動への参加頻度が高い者については62.5%、低い者については37.3%であった。部の活動への参加頻度と部の活動を継続する意欲との関連は統計的に有意（1%水準）であり、参加頻度が高い者は、低い者よりも、部の活動を続けたいと答える傾向が2.8倍であった。
- 7) ただし、先述と同様の理由もあってか、統計的に有意な関連があるとはいえなくなっている。

VI ジェンダー意識—身体性との関わりを中心に—

A 問題の所在

1 はじめに

本章では、生徒の分化が表れる一側面として、「ジェンダー意識」を取り上げ、「ジェンダー意識」が学校生活におけるどのような側面によって規定されているのかを探ることを目的とする。「ジェンダー意識」とは、個々人が性別や両性の関係性に対して抱いている意識やイメージの総称である¹⁾。

進路選択や生徒文化を扱ったこれまでの研究の多くは、ジェンダー変数への着目を欠くことによって女子の存在を無化したり、分析結果のジェンダー差を十分に説

明してこなかったことが、ジェンダー研究者から批判の対象となってきた（代表的なものとして、天野 1988）。進路選択や生徒文化といった生徒の分化の規定因が、主に学業成績という軸だけで説明されてきたことを批判的に検討し、部活動など学業以外の学校生活の諸側面に生徒の分化の規定因を探るということが本研究の共通枠組であるが、女子の場合、進路選択や生徒文化が学業成績だけでは十分に説明できないことが既に指摘されており、「性役割観」「女性性」等が、女子生徒の分化を促す軸として、学業成績とは独立の規定力を持つことが実証されている²⁾。本章では、「性役割観」「女性性」等を包括的に含みこむ概念として「ジェンダー意識」を措定し、複数の「ジェンダー意識」項目を用意した上で、それぞれの「ジェンダー意識」が何によって規定されているのかを探ることを目的とする。その際、「運動能力」という身体性にかかわる側面との関連を中心にみていく。

2 〈ジェンダー〉としての身体性—身体性に着目する理由

ここで、「ジェンダー意識」を規定する要因として特に「身体性」に着目する理由は、以下の通りである。

教育社会学のジェンダー研究において〈身体〉が対象となることは従来あまりなかった。その理由は、ジェンダーという語じたいが、「身体的・自然的」な性を表すセックスという語の対立概念として、「社会的・文化的」性を表すために採用された用語だからである。性別が「社会的・文化的」につくられるものだと規定することによって、性差を可変的なものととらえることがはじめて可能になったといえる。

しかし、ジェンダーという語の持つ「社会的・文化的につくられた性」という含みは、ジェンダー研究から女性の（あるいは男性の）「身体そのもの」へのまなざしを、意識的にせよ無意識的にせよ「遮断」する効果を生んだ。「身体そのもの」を問題にすることは、ようやく獲得した「ジェンダー」という視点から、伝統的な「セックス」という本質主義への回帰を意味するものとして恐れられたといえる。

このような状況に一石を投じる役割を果たしたのがバトラー（抄訳1995）である。彼女の立論を単純化して言えば、「セックス（身体的・自然的な性）はジェンダー（性別秩序）によってつくられる」ということになる。ジェンダー（社会的・文化的な性）が「つくられる」という従来のジェンダー研究の認識は、はからずもその背後にあるセックス（身体的・自然的な性）を「普遍」の

ものとして措定してしまっている。しかし、問題にすべきは〈身体〉そのものが「男-女」という二項対立的な図式(=性別秩序)によって絶えず産出されているということなのである。

本研究の調査対象である中学生という時期は、身体的・精神的発達の両面において、非常に大きな変化を経験する時期であり、自らの女性性・男性性に対して意識させられることによって、ジェンダー・アイデンティティの形成に大きな意味を持つと考えられる。かの女らかれらにとって、自らの身体性や身体にかんする様々な意識やイメージが、「ジェンダー意識」の形成にかかわっていることは十分に考えられるといえよう。

3 先行研究の検討

まず、木村(1990)は欧米の学校社会学を手がかりに、学校が女子生徒に「学業達成」と「女らしさ」という相反するメッセージを送っていることを指摘し、2つのメッセージに対する適応・反抗によって、学校文化に対する女子の対応を4つのタイプに分類できることを仮説的に図示している。

また、中西(1993, 1998)は、女子の進路分化を決定する要因として、「成績」の他に、個々人の「性役割観」、あるいは「学校組織の特徴」が大きな影響を持つことを数量的データから明らかにしており、先に天野(1988)が提示した「ジェンダーと教育」研究の流れと、トラッキング理論に依拠した進路分化・生徒文化研究の両方の流れを汲むものとして評価することができる。

吉原(1995)は、女子大学生の職業選択の分化を「女性内分化」として捉え、分化の規定因となるのは「女性性」への距離のとりかたや受け容れの程度であるということ、数量データを用いて明らかにしている。

これらの研究はいずれも、女性には業績主義が完全には適用されず、「女性らしさ」をどの程度内面化しているかによって学校適応や進路選択、職業選択が左右されるということを指摘した点で非常に重要である。しかし同時に、次に挙げるような共通した問題点を指摘することができる。

一つは、「学校の要求する女らしさ」「性役割観」「女性性」などのいずれもが、一元尺度的な変数として捉えられていることである。従来の「ジェンダーと教育」研究においては、説明すべき従属変数として主に進路やキャリア・パターンの分化に重点を置いてきた関係上、「性役割観」「女性性」などの、女性の進路分化に影響を与える学業以外の規定因を、単純に一次的な分布を

描くような尺度として捉えてきた傾向がある(例えば、伝統的・流動的という軸で捉えられる性役割観)。しかし、吉原が「女性性」を「カテゴリーとしての『女』に付与される『らしさ』の総体」と定義していることからわかるように、「女らしさ」「性役割観」「女性性」等は、さまざまな側面から測られる多元的な軸を持つものとして想定することが可能なはずである。例えば宮崎(1993)は、女子高校生に対するフィールド・ワークとインタビューをもとに、友人グループごとのジェンダー・サブカルチャーを明らかにしているが、そこでは、グループごとに多様な「性役割観」「女性性」が見出されており、それらを一元尺度的に並べることは困難である。「一言で性役割といってもそこには様々な局面があり、一人の生徒においてさえゆらぎが見られる」(170頁)と宮崎が述べているように、「性役割観」「女性性」等の概念は様々な側面を包含しており、個々の側面をそれぞれ別個の変数として捉えることができるといえよう。

また、これまでの研究は「ジェンダーと教育」研究の名のもとで、女子のみを研究対象にすることが多かった。しかし、〈ジェンダー〉を両性の関係性として捉えるならば、当然男子もまた「ジェンダーと教育」研究の対象として、分析の俎上に乗せる必要がある。それは、従来の男子を主たる対象とした進路選択・生徒分化にかんする研究が扱ってこなかった、学業成績だけに還元されるのではない「男性性」の側面に焦点を当てることでもある。

4 課題の設定

本章における課題は次の二点である。第一に、「女性性」および「男性性」を多元的に捉えるため、「ジェンダー意識」にかかわる変数を複数用意し、それぞれを男女別に比較することによって、中学生の抱えている「ジェンダー意識」のおおまかな傾向を捉える。第二に、「ジェンダー意識」を規定する要因の一つとして「身体性」がなんらかの影響を及ぼしているという仮説のもと、「運動能力の自己評価」と「ジェンダー意識」との関連を検証する。

B 「ジェンダー意識」の概要

1 社会レベルのジェンダー意識(性差意識)と個人レベルのジェンダー意識

本章では、7つの項目を「ジェンダー意識」項目として用意した。「ジェンダー意識」は大まかに分けて二つのレベルから捉えることができる。一つは、社会におけ

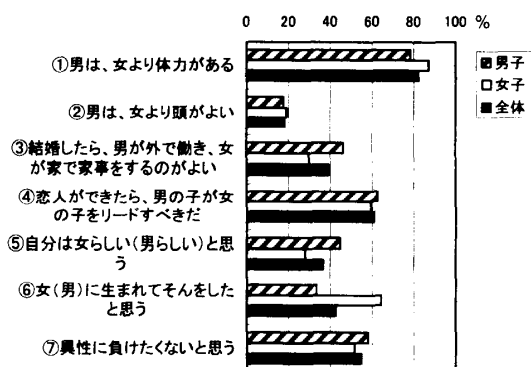
る両性の一般的な位置関係をどのようなものとしてイメージしているかというレベルであり、もう一つは、個人々が特定の性別を持つこと（「女である」／「男である」こと）によって経験的に形成される個人的意識のレベルである。それぞれは、便宜的に「社会レベルのジェンダー意識」、「個人レベルのジェンダー意識」と呼ぶことができ、前者については「性差意識」と言い換えることができる³¹。

図VI-1は、7つの「ジェンダー意識」項目の単純集計結果と男女別の集計結果をグラフに表したものである³¹。それぞれの項目に肯定的な回答をした者（「とてもそう思う」「まあそう思う」の合計）の割合を示している。

まず、①～④の項目は「性差意識」にあたる項目である。①と②はそれぞれ、①「身体的能力」（以下、「体力」）および②「知的能力」における男性の女性に対する優位性を表す項目である。③と④はいずれも旧来型の性別役割を表す項目で、それぞれ③「性別役割分業」と④「男性主導の恋愛観」を表している。調査対象である中学生にとって、③は将来の性別役割に対するイメージを尋ねる質問であるのに対し、④はより身近な性別役割に対するイメージを尋ねる質問になっている。

⑤～⑦の項目は、「個人レベルのジェンダー意識」にあたるもので、⑤は自分が性別に求められる諸特性に適合的であるかどうかの自己評価（＝「性別適合度」）、⑥は自分の性別に対して不満を感じるかどうか（＝「性別不満度」）、⑦は異性に対する競争心の有無を尋ねる質問（＝「異性への競争心」）である。

図VI-1 ジェンダー意識項目の単純集計



2 単純集計結果より

まず、「性差意識」のうち①「体力」および②「知力」の男性優位を示す項目について肯定する者の割合を見てみよう。アカデミック・アチーブメントにつながる「知力」の男性優位性を肯定している者は全体の18.2%にと

どまっているのに対し、身体的・生理的性差と見なされている「体力」の男性優位性を肯定する者は、全体の82.3%にのぼっている。さらに「体力」について男女別に見ると、男子78.3%に対して女子は87.2%と、女子の割合が男子を有意に上回っている ($p < 0.005$)。つまり、中学生においては、知的能力の面での男女差が存在すると考える者は少ないが、身体的能力の面では8割以上が男女差を認めており、そうした傾向はむしろ男子よりも女子の方が強いということが明らかになった。

次に、③「性別分業」および④「男性主導の恋愛観」を見てみよう。伝統的な性別役割分業を受け容れているのは全体の38.9%と4割に満たないが、中学生にとってより身近な恋愛における両性関係のあり方については60.9%と、逆に6割以上が男性主導の恋愛観を受け容れている。また、「性別分業」に関しては、男子46.3%、女子29.7%と、男子の方が肯定する割合が有意に高く ($p < 0.001$)、男女間における意識の差が顕著に現われているといえる。

⑤「性別適合度」については、男子の44.6%が自分を「男らしい」と評価しているのに対し、自分を「女らしい」と評価する女子は28.0%と3割に満たない ($p < 0.001$)。これは、「男らしさ」に適合的であることよりも「女らしさ」に適合的であることの方が困難であることを示していると言えよう。さらに、女子の64.2%が⑥「性別で損をした」と感じているのに対し、男子で性別による不利益を感じているのは約半分の33.2%である ($p < 0.001$)。大半の女子が、既に中学の段階で「女であること」によって被る不利益を経験していることが推測される。また、⑦「異性に負けたくない」と思う者の割合は全体の54.8%で、男子57.9%に対し女子51.5%と、男子の方が若干高くなっていることが確認できる。

以上、7つの「ジェンダー意識」の単純集計結果から明らかになったことは、以下の三点にまとめられる。第一に、知的能力における男女差が否定される一方で、身体的能力については男子の優位性が広く受け容れていること、第二に、将来的な性別分業には否定的な者が多い一方で、約6割が男性主導の恋愛観を受け容れていること、第三に、女子に比べ男子の方が自らの性別に適合ないし適応していること、である。

C ジェンダー意識と運動能力

1 性別適合度と運動能力の自己評価

前節において、中学生男女が「体力」、すなわち身体的能力において男性の方が優位であるという「性差意識」を広く受け入れていることが明らかになった。この

ことは、中学生にとって、身体的能力というものが「男性」というジェンダーの象徴的資源であることを意味しているといえる。そのことをさらに確認するため、ここでは「男らしい・女らしいと思う」ことが、身体的能力、すなわち「運動能力」と関連しているのかどうかについてみてみることにする。

表VI-1は、「男らしい・女らしいと思う」という項目を、男女別に成績の自己評価（3段階）および運動能力の自己評価（3段階）とクロス集計したものである。その結果、成績による違いは男女とも認められなかった。しかし、運動能力については、男子の場合、運動が「得意」であるほど自分を「男らしい」と思うという関係が見いだされた。男子にとって、「運動が得意である」ということは「男らしさ」の規範に適合するものであるといえる。それでは、女子にとって、「運動が得意である」ことは「女らしさ」に適合しないという男子と逆の関係があるのかというと、そうではない。女子にとっては、「運動能力」も「成績」と同様に、「女らしさ」とは無関係である。つまり、「運動能力」というファクターは、男子に対してのみ、性別への適合を高める効果を持つという特徴を持っているといえる。

2 性別分業観、恋愛観と運動能力の自己評価

次に、「性差意識」の中で評価が二分されている③「性別役割分業」および④「男性主導の恋愛観」の二つの項目について、成績・運動能力による違いがあるかどうかをクロス集計でみてみよう（表VI-2）。まず、成績による違いを見てみると、男女とも、③「性別分業」については、成績下位者ほど肯定する割合が高くなるという傾向がわずかに認められるものの、いずれの項目についても際立った相関を見いだすことはできない。これは、「性別適合度」に対する成績の影響がみられなかったのと同様、「ジェンダー意識」は成績によって規定されないことを、あらためて示す結果といえる。

一方、運動能力による違いをみてみると、男子の場合、「性別分業」「恋愛観」いずれの項目においても、「運

動が得意」であるほどそれぞれの項目を肯定する割合が高いという相関関係が認められる。

同様に、女子について「性別分業」および「恋愛観」の「運動能力」による違いをみてみる。すると、「性別分業」との関連はみられないが、「恋愛観」については、これまでの結果と異なり、「運動」が「得意」または「普通」である者の方が、「苦手」な者よりも「男性主導の恋愛観」に肯定的であるという関連を見出すことができる³⁾。

以上の結果から言えることは、第一に、「運動能力」という身体性の一側面は、男子の「ジェンダー意識」に対して非常に大きな影響力を持っているということである。男子にとって、「運動能力が高い」ということは、「男らしさ」の象徴的資源であり、また、伝統的な性役割観である「性別役割分業観」や「男性主導の恋愛観」といった「ジェンダー意識」への肯定度を高めるファクターとして位置づいている。第二に、「運動能力」は女子の「ジェンダー意識」に対し、ある種錯綜した関連性をもっている。すなわち、男子において見出されたような、運動能力が高いことが伝統的な「ジェンダー意識」の受け入れ度の高さと密接に関連しているという「単純」な（換言すれば、一元尺度的な）関係ではなく、ある位相の「ジェンダー意識」とはなんら関連付けられない一方で（例えば、伝統的な「性別役割分業」）、異なる位相の「ジェンダー意識」に対しては一定の傾向で相関関係にある（例えば、「男性主導の恋愛観」という、一見すると矛盾を含んだ、複合的な関係があると考えられる。

3 まとめと今後の課題

本章では、「性別適合度」、「性別役割分業観」、「男性主導の恋愛観」という3つの異なる「ジェンダー意識」について、身体性の次元である「運動能力」との関連を、同じ項目の「成績」との関連と比較することによってみてきた。その結果、「運動能力」は男子の「ジェンダー意識」に対して、一貫して強い影響力をもってお

表VI-1 性別適合度と運動能力・成績の自己評価のクロス表

性差意識		運動能力（3段階）			カイ 2乗値	n	成績（3段階）			カイ 2乗値	n
		得意	普通	苦手			上位	中位	下位		
男らしい・	男子	56.8	45.7	28.3	17.080***	468	49.6	48.1	39.7	3.786	471
女らしい	女子	24.3	29.3	28.6	0.677	428	33.9	29.8	23.0	4.127	421

*** p<0.005, **p<0.01, *p<0.05

表VI-2 性差意識と運動能力・成績の自己評価のクロス表

性差意識	性別	運動能力 (3段階)			カイ 2乗値	n	成績 (3段階)			カイ 2乗値	n
		得意	普通	苦手			上位	中位	下位		
男は仕事、 女は家庭	男子	55.0	47.1	36.3	7.295*	470	42.8	45.3	51.1	2.366	473
	女子	33.8	31.6	27.3	1.093	433	23.9	31.4	34.6	3.576	424
男は女を リードする	男子	77.3	61.4	48.4	19.097***	469	61.9	67.3	60.3	1.860	472
	女子	67.6	65.0	44.5	16.706***	433	64.2	56.9	57.4	1.686	424

*** p<0.005, **p<0.01, *p<0.05

り、一方で女子の「ジェンダー意識」に対しては、一部の項目でのみ強い影響力をもつという、非一貫的な関連性をもつことが明らかになった。

女子の「ジェンダー意識」は、A節3項で触れたように、一元的な尺度としては想定できないような複雑さ・多元性を持っていると考えられ、したがって、「運動能力」が影響力を持つ位相と、そうでない位相とが現れたものと推測できる。「運動能力」が相対的に高い女子が、とりわけ「男性主導の恋愛観」という男性とのミクロな関係性における性役割を受容しているのはなぜなのか、その点を補足的に解析するデータを見出すことはできなかった⁶⁾。「運動能力」を含めた「身体性」と、「ジェンダー意識」とりわけ女子の〈ジェンダー〉形成がどのような関係にあるのか、あるいは運動ないしスポーツという身体実践がいかにして男女の〈ジェンダー〉を形成するのか⁷⁾、については、今後エスノグラフィックな調査を視野に入れながら、詳細な検討を進めていく必要がある。

(羽田野慶子)

註

- 1) 本研究における「ジェンダー意識」概念は、多様な側面や次元のものを含みこんでいる。したがって、「ジェンダー意識」という用語によって、ある特定の意識を指し示すものではないことに留意する必要がある。
- 2) 中西 (1993, 1998), 吉原 (1995) など。
- 3) 江原 (1999) は、「性差に関する信念体系」を「性差意識」と呼び、「能力・性格・身体・外見・行動様式・役割などにおける、性差や『男らしさ・女らしさ』などの性別特性についての、意識・知識・信念・規範などを含む包括的な概念」(193頁)と定義している。江原の言う「性差に関する信念体系」(=「性差意識」)は、本研究における二つのレベルの「ジェンダー意識」のうち、「社会レベルのジェンダー意識」に相当すると考えられる。
- 4) ⑤～⑦の質問文は、女子はそのまま、男子はカッコの中を読

んで答えてもらった。

- 5) なお、「運動部 文化部」と「部活に力を入れている 入っていない」を独立変数として、「性別適合度」「性別役割分業」「男性主導の恋愛観」とクロスさせてみたが、強い相関は見られなかった。
- 6) 考えられうる理由を仮説として挙げるとすれば、次の二つがある。
まず一つは、運動能力の高い女子が、「恋愛」に親和的なピア・グループに属しているという可能性である。ピア・グループに深くコミットすることを通じて「男性主導の恋愛観」を「内面化」する度合いが高まる、という仮説である。二つめは、女子にとって運動能力がある程度高いということ自体が、「恋愛」に親和的であるという可能性である。つまり、恋愛という男女の関係性において、男子・女子ともにある程度の身体的能力を持っていることが「恋愛」へのコミットを高める効果を持つ、という仮説である。おそらく、そのような関係性において、女子は運動能力が普通以上、かつ(ペアの相手である)男子よりも低いということが期待されていると想定される。
- 7) 身体性とジェンダー意識は、一定の方向性を持った、「片方がもう片方を規定する」関係にあるのではなく、意識と身体性が常に相互に影響し合い、身体実践としての〈ジェンダー〉が産出されると考えるべきである。

VII 中学生の分化モデル

以上、Ⅲ章では、生徒文化と進路選択の分化には、学業成績だけではなく、運動能力といった軸が存在しており、部活動へのコミットメントは特に学校適応に影響していることが明らかになった。また、Ⅳ章では、部活動での友人関係に重きを置く集団を部活仲間と呼んで弁別し、これはチームか個人競技か、入賞するかどうかなどの、活動形態に規定され、生徒の分化を生み出す小集団としてその規定関係が明らかになった。Ⅴ章では、部活動には、家庭環境と中学生のスポーツ・文化的活動への関与の関連を媒介するとともに、それが、スポーツ・文化的活動への関わりにみられる家庭環境による差異を縮減している可能性があることを指摘した。第Ⅵ章では、運動能力は男子にとって「男らしさ」の象徴的資源であり、伝統的なジェンダー意識への受け入れを一貫して高

めるが、女子にとっては恋愛観にのみ関連することがわかった。

これらの知見を踏まえ、まず、中学校における教育活動の組織化のありようにはどのような特徴があるのかを考察し、次に、中学生の分化の様相をいかにして捉えていくことができるのかを模索することにしよう。

A 中学校における教育活動の組織化

日本の中学校の教育活動は、学業成績のみを軸に組織化されているわけではない。生徒たちの分化を教師文化への対処行動として理解するならば、彼らの分化の軸が学業成績以外にも見いだされたことによって、日本の中学校の教育活動は学業成績という軸だけに基づいて組織化されているのではないことが間接的ながら実証されたと言えよう。

中学生の分化に関して、今回の分析で見いだされた学業成績以外の規定因が運動能力と部活動であることから、中学校の教育活動もそれに対応して組織化されていると考えられる。まず運動に関しては、周知のように体育は中学生たちがもっとも好む教科の一つであり、学校行事にも運動会や球技大会、水泳大会など、彼らを熱中させる運動系のイベントが配置されている。このような教育活動の組織化のありようから考えられることは、学校が特化している能力とは、学業に関する能力だけではなく、運動に関する能力も含まれるということである。生徒側から見れば、学業と同時に運動が、学校における適応課題なのである。次に部活動に関しては、学校生活のなかで部活動は大きな比重を持っており、特に部活代替の制度のもとでは中学生のほぼ全員が部活動へと参加しているため、その影響力は大きくなると考えられる。部活動の影響力をさらに強める要因として、ステータスシステムが考えられる。白松(1995)は、高校段階では、学校ランクの中・下位の学校において部活動がステータスシステムとして機能し、学校適応を促進することを指摘しているが、それは中学校でも見られるだろうか。そこで、部活動に参加することで得られることを尋ねた設問での「表彰されて校内で有名になれる」という選択肢を、部活動のステータス意識として用い検討した。

部活コミットメントと部活動のステータス意識をクロス集計したところ、部活動のステータス意識の高い生徒の方が部活動へのコミットメントが強い($n=816$, $p=0.000$)。部活動には、それへのコミットメントを高めるようなステータスシステムが存在していることが示唆される。また、部活動のステータス意識と運動能力をクロ

ス集計すると、運動が得意であると答える者の方がステータス意識を持っているという相関が有意であった($n=815$, $p=0.000$)。ステータスシステムを利用できる生徒は、運動能力の高い生徒であり、ここにも運動能力が重要な役割を担っていることが示されている。では、中学校における部活動のステータスシステムは、高校におけるそれとどのように異なるのだろうか。

前述のように、高校におけるステータスシステムは、学校ランク上位ではなく、中位と下位の学校において機能しているという。公立中学校間には基本的に学力水準による差異がない¹⁾。そこで、部活動へのコミットメントと部活動のステータス意識を学業成績によって統制し、学業成績による何らかの違いが見られるかどうか確かめてみた。しかし、学業成績の中位者と下位者のみならず、上位者においても10%水準ながら、有意な相関が認められた(上位: $n=229$, $p=0.098$ 中位: $n=287$, $p=0.001$ 下位: $n=294$, $p=0.000$)。学校間に基本的にトラッキングの存在しない公立中学校では、学業成績の如何に関わらず、部活動のステータスシステムが機能しているのである²⁾。

以上のことから、中学校の教育活動の組織化には、次のような特徴があると考えられる。すなわち、第一に、学業成績と運動能力が生徒たちの主たる分化の軸となっていること、それに対応して、第二に、学業と同時に運動も教育活動の組織化における重要な契機であること、第三に、部活動はステータスシステムとして機能し、生徒たちに対する運動や部活動の重要性を高めていること、の三点である。それゆえ、中学生の分化メカニズムを探究する際には、このような特徴を考慮して行う必要があるのである。

B 多元的学校文化モデル

これまで検討してきたような学業成績以外の軸による生徒の分化をも視野に入れた場合、彼らの分化を捉えるためにはどのようなモデルが想定されるだろうか。

これまでの分析で確認されたのは、生徒文化や進路希望の分化の主たる規定因が学業成績や運動能力であることだった。生徒たちは学校で、学業成績という軸によって組織化された授業やテストなどの教育活動を体験する一方で、運動能力という軸によって組織化された体育の授業、運動系行事、部活動などの教育活動を体験している。これらの体験が学校内における生徒たちの分化の重要な契機となっていると考えられる。

もちろん、学業成績と運動能力という二つの軸の働き方は必ずしも同一ではない。たとえば、学校適応につい

ては、学業成績は上位であるよりも下位に位置することが、運動能力は下位であることよりも上位であることが効いており、運動能力は学業成績の中・下位の者に補償的な機能を果たしている。また、進路希望については学業成績が直接的に影響を与えているのに対し、運動能力の影響は、部活動を進学先の選択の際に重視する者だけに認められた。加えて、部活動にはステータスシステムという文化的装置が付与されることによって、生徒たちの学校適応を促進する一方で、運動能力の重要性を高めている。

しかし、二つの軸の働き方如何に関わらず、従来の地位欲求不満説などの、学業成績のみによる一元的なモデルでは、生徒たちの分化を捉えきれないことは明白である。では、どういったモデルが適切なのだろうか。この点について志水(1987)による次の見解を手がかりに考察しよう。

志水は、学校は、生徒集団にさまざまな異なる体験を付与することを通じて、彼らを社会的に分化させる重大な契機となっているという。しかし、そこに想定されているのは、学業成績による序列化という分化の契機と、高校に見られるような学校序列による学校文化の違いという分化の契機である。この場合、トラッキング・パースペクティブに基づく、学業成績を軸とした一元的な尺度による学校文化の「成層性」が前提とされている。

しかし中学校では、基本的に学校序列も、トラッキング概念が前提としている生徒たちのグルーピングも存在しない。この場合、第一に、生徒を分化させる契機となる学校文化の違いは、学校間ではなく学校内にあると考えられ、第二に、われわれがこれまで明らかにしてきたように、生徒を分化させる契機には学業成績以外の軸によって規定される学校文化も存在している。つまり、学業成績や運動能力、部活動のステータスシステムといったそれぞれ次元の異なる学校文化の「多元性」が、「学校内」にそれぞれ相対的に独立して存在しているのである。とはいえ、それらの学校文化にも「成層性」がないわけではない。なぜなら、運動能力の高低や部活動へのコミットメントの強弱が見られるからである。このように考えるならば、中学生たちの分化のメカニズムは次のように捉えられよう。すなわち、生徒文化や進路選択の分化は、生徒たちが多元的な学校文化のどの次元に高い「意義づけ」をするか、その結果としてどの次元の学校文化を重点的に経験するのか、さらに、重点的に経験する学校文化の持つ成層性のどこに位置づけるのか、といったことによって顕在化するというメカニズムである。

生徒の分化に関するこのような捉えかたを、従来の学

業成績による一元的なモデルに対して、「多元的学校文化モデル」と呼ぼう。この「多元的学校文化モデル」を採用することで、第一に、トラッキング・パースペクティブという、学業成績と明確なグルーピングを前提とした枠組みでは捉えきれない、「教育と選抜との関係が複雑かつ微妙に入り組んでいる」(志水 1989)状況を詳細に踏査していくことが可能になる。第二に、学業成績のみならず、運動能力や部活動の重要性が高い日本の学校組織や学校の内部過程にはどのような特徴があるのか、第三に、そのなかで暮らしている子どもたちにとって学校がいかなる意味を持っているのか、といったことを詳細に把握していくための足がかりとなる。

(藤田武志)

註

- 1) もちろん地域的な差異、階層的な差異などに起因して、客観的には学校による学力水準の相違が見られる場合もある。
- 2) この点について、運動部か文化部かによって違いがあるかどうか確かめるため、部活のステータス意識と部活コミットメントを運動部と文化部で統制したところ、双方とも有意な相関が見られた(運動部: $n=530$, $p=0.000$ 。文化部: $n=261$, $p=0.030$)

おわりに

本研究では、部活動や運動能力といった、中学生の分化に関する学業成績以外の規定要因を検討し、彼らの分化の様相を捉えるための「多元的学校文化モデル」を提出した。最後に、今後に残された課題を指摘しよう。

第一に、今回は東京都を事例とした分析であり、今後は他の地方をも対象とした調査、研究によって考察を深めていく必要がある。第二に、中学生の分化を規定する諸要因が、学校内においていかなるメカニズムで機能しているのか、質問紙調査で捉えきれない具体的な様相を、観察調査やインタビュー調査によって補完していく必要がある。第三に、今回は、部活動に焦点化して考察しているが、「多元的学校文化モデル」の多元性について、別の側面からも検討することによって、その多元性のありよう自体を明らかにしていく必要がある。第四に、今回は一時点における分析であり、分化のダイナミクスを捉えるために継時的な調査が必要である。第五に、社会の変容やそれにとまなう子どもの変容が指摘されている現在、中学生の分化も変化しているのか、しているとすればそれはいかなる変化なのかを捉えるため、今回の分析を歴史的に相対化する必要がある。いずれに

せよ、残された課題は多い。地道な実証研究の積み重ねが望まれる。

(藤田武志)

《引用・参考文献》

天野正子 1988 「『性と教育』研究の現代的課題」『社会学評論』155

伴恒信 1990 「学校文化と生徒の意識」『教育内容・方法の革新』教育開発研究所

Coleman, J.S. 1961 "The Adolescent Society". Free Press.

海老原修・畑栄一・池田勝・宮下充正 1982 「子どものスポーツへの社会化に関する研究：その2—出生順位との関連を中心に—」『日本体育学会第33回大会号』

江原由美子 1999 「男子高校生の性差意識」藤田英典ほか編『教育学年報7 ジェンダーと教育』世織書房

藤田英典 1977 「教育達成および職業達成の機会構造—その概念的考察と実証的分析」『名古屋大学教育学部紀要—教育学科』24巻。

—— 1980 「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣選書

藤田英典・宮島喬・秋永雄一・橋本健二・志水宏吉 1987 「文化の階層性と文化的再生産」『東京大学教育学部紀要』第27巻

藤田英典・宮島喬・加藤隆雄・吉原恵子・定松文 1992 「文化の構造と再生産に関する実証的研究」『東京大学教育学部紀要』第32巻。

深谷昌志編 1998 『モノグラフ・中学生の世界 vol.59 閉塞状況の中の生徒たち』ベネッセ教育研究所

樋田大二郎他 1999 「高校生文化と進路形成の変容(1)」『聖心女子大学論叢』第92集。

石川憲彦 1999 「教師は子どもに向き合えるか—教育相談の観点から」油布佐和子編『教師の現在・教職の未来 あすの教師像を模索する』教育出版。

岩木秀夫 1980 「中・高校生の学校生活と進路形成—中等教育の構造と機能に関する研究(1)」『東京大学教育学部紀要』第20巻。

岩田考 1998 「『総合学科』高校における『選択制』とメリトクラシーの変容に関する一考察—『個性』をめぐる〈加熱〉と〈冷却〉」日本教育社会学会第50回大会発表配付資料。

Butler, Judith 1995 「セックス ジェンダー 欲望の主体(上・下)」『思想』846, 847。

苅谷剛彦 1981 「学校組織の存立メカニズムに関する研究—高等学校の階層構造と学校組織—」『教育社会学研究』第36集

Kenyon, G. S. 1970 "The use of path analysis in sport sociology with special reference to involvement socialization." *International Review of Sport Sociology* vol.5.

菊地栄治 1986 「中等教育における『トラッキング』と生徒の分化過程—理論的検討と事例研究の展開—」『教育社会学研究』第41集。

木村涼子 1990 「ジェンダーと学校文化」長尾彰夫・池田寛編『学校文化』東信堂。

糸野豊・池田勝・山口泰雄 1979 「パス解析によるスポーツ参加の分析」『筑波大学体育紀要』2巻

横常三編 1992 『中学校クラブ活動・部活動の弾力的運営』明治図書。

耳塚寛明 1980 「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』第35集。

—— 1986 「中学校における教育選抜過程—成績の自己

評価と進路展望に関する追跡的研究—」国立教育研究所『研究集録』No. 13

—— 1988 「学校における教育指導」『親と教師のための思春期学 4 学校』情報開発研究所。

—— 1992 「社会組織としての学校」柴野昌山・菊池城司・竹内洋編『教育社会学』有斐閣

—— 1993 「学校社会学研究の展開」『教育社会学研究』第52集

耳塚寛明・苅谷剛彦・濱名明子・庄健二 1983 「小・中学校における学校生活の変容過程に関する継時的研究(1)」『東京大学教育学部紀要』第23巻

耳塚寛明・堀健志・大多和直樹 1998 「高校生文化と進路形成の変容(2)」日本教育社会学会第50回大会発表原稿。

宮崎あゆみ 1993 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス」『教育社会学研究』第52集。

宮島喬・藤田英典編 1991 『文化と社会—差異化・構造化・再生産—』有信堂

中西祐子 1993 「ジェンダー・トラック—性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察—」『教育社会学研究』第53集

—— 1998 『ジェンダー・トラック』東洋館出版社。

志水宏吉 1985 「配分機関としての中学校—進路指導の社会学的分析—」『東京大学教育学部紀要』第25巻。

—— 1987 「学校の成層性と生徒の分化—学校文化論への一視角—」『教育社会学研究』第42集

—— 1989 「中等教育の社会学—研究動向の整理と展望—」大阪教育大学教育学部研究室編『教育学論集』第18号

白石義郎 1985 「学校文化と生徒文化—生徒の社会学—」柴野昌山編『教育社会学を学ぶ人のために』有斐閣。

白松賢 1993 「部活動に関する実証的研究—学業成績・進学アスピレーションとの関係を中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第39巻第1部

—— 1994 「部活動と生活文化の関係に関する研究」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第40巻第1部。

—— 1995 「生徒文化の分化に与えた部活動の影響—高等学校を中心に—」日本子ども社会学会『子ども社会研究』創刊号

—— 1996 「生徒集団に与える部活動の影響—高校を中心に—」中国四国教育学会『教育学研究紀要』第42巻第1部

—— 1997 「高等学校における部活動の効果に関する研究—学校の経営戦略の一視角—」日本教育経営学会『日本教育経営学会紀要』第39号。

武内清 1972 「生徒の下位文化をめぐる」『教育社会学研究』第27集。

—— 1993 「生徒文化の社会学」木原孝博・武藤孝典・熊谷一乗・藤田英典編『学校文化の社会学』福村出版。

竹内洋 1987 「職業高校の学校内過程」『京都大学教育学部紀要』第33号。

—— 1995 『日本のメリトクラシー—構造と心性』東京大学出版会。

多々納秀雄・厨義弘 1980 「スポーツ参加の多変量解析(Ⅰ)—数量化理論第Ⅱ類による要因分析—」『健康科学』第2巻

潮木守一・藤田英典・滝充・佐藤智美・川嶋津津夫・岩田弘三 1980 「中学校文化の構造分析—進路展望の形成過程—」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第27巻。

山口泰雄・池田勝 1987 「スポーツの社会学」『体育の科学』vol.37, no. 3。

吉原恵子 1995 「女子大学生における職業選択のメカニズム—女性内分化の要因としての女性性—」『教育社会学研究』第57集